

社 会 科 教 室

第 1 4 4 号

平成14年度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

さらなる研究実践で子供に「確かで豊かな学力」を

完全学校週五日制と学習指導要領に基づく教育活動が展開されている昨今、この実施に当たっていくつかの課題が生じています。その課題とは、○授業時数削減の中で開かれた学校として特色ある学校づくりをどう進めるか ○総合的学習の指導計画の改善をどう進めるか ○弾力的な「カリキュラム」はどのように組めばよいか等であります。その課題解決の糸口として、基礎・基本の確実な「定着学習」とその「発展学習」、少人数による授業の工夫、確かな学校行事、特色ある学校づくりのための学友連携、地域社会の支援・協力等で解決を図っていかなくてはなりません。

香社研では、13年度より進めてきた新刊図書「基礎・基本の定着と発展学習」サブテーマとして指導と評価の統一の研究を進め、本年度に出版することができました。

内容としましては、前述した基礎・基本の徹底を図る楽しく「できる」から「分かる」学習を構成し、その過程の指導と評価の統一、学習内容（内容知）、学習方法（方法知）と学習形態の工夫による個別化と個性化の実践研究です。

次に香社研では、県下のすべての子供に「確かで豊かな学力」を保障していくために「教師としての専門性を高めていく」ことが求められています。平成9年から13年度まで改善を加えてきましたが、本年はこれまでの研究をより発展させるために「社会科基底単元」を改訂する方向で研究を進めています。

なお、香社研の研究を発表するために夏季研修会を丸亀市社研の先生方の協力のもと、研究テーマとして～公民的資質を支える基礎・基本の定着と自ら学ぶ問題解決的学習の展開～を掲げて発表を行います。午後は各郡市の発表と文部科学省の安野 功先生のご講演もごございますので、ご案内を兼ねてごあいさついたします。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会
会 長 古 市 聖 治

平成13年度 定例研究集会・夏季研修会報告

1 定例研究集会

○ 6月定例会（高松）

- ・ 月 日 6月30日
- ・ 場 所 高松市立中央小学校
- ・ テーマ 「社会科」基礎・基本の定着を図る
- ・ 授 業 6年「三人の武将と全国統一 ～信長の人物像から、自分の生き方を探ろう～」
- ・ 授業者 稲田 耕一（高・中央小）
- ・ 提案者 大嶋 和彦（高・鶴尾小）
- ・ 司会者 姫田 朋樹（高・太田南小）
- ・ 記録者 熊野 真美（高・古高松小）
- ・ 指導者 池内 博 先生

○ 7月定例会（坂出・綾歌）

- ・ 月 日 7月 7日
- ・ 場 所 坂出市立体育館
- ・ 提案者 吉田 和弘（坂・東部小）
「豊かな生き方を探求する社会科学習 －基礎・基本の定着と問題解決力の育成を通して－」
白川 豊浩（坂・中央小）
「歴史学習の楽しさを感じながら、歴史意識を高める学習を求めて－貴族から武士の時代へ～平清盛と崇徳上皇～の実践を通して－」
- ・ 司会者 野村 亮子（坂・西部小）
- ・ 指導者 合田 雅気 先生

○ 9月定例会（丸亀・仲善）

- ・ 月 日 9月29日
- ・ 場 所 県立丸亀競技場
- ・ 提案者 多田 明広（丸・城南小）
佐々木美華（丸・城坤小）
「自分づくりの社会科学習 －子どもの学びを支える学習の再構築～交通事故からくらしを守る～の実践を通して－」
高家 和彦（仲・仲南北小）
「広い視野に立って判断・意思決定する力を育成する社会科学習 －伝統的な技術を生かした工業（わたしたちの生活と工業生産）－」
- ・ 指導者 岩崎 保雄 先生

○ 10月定例会（木田・香川）

- ・ 月 日 10月20日
- ・ 場 所 三木町立平井小学校
- ・ テーマ 社会科の基礎・基本をふまえ、子どもが主体的に創る社会科学習
- ・ 提案者 前田 宏之（木・平井小）
「わたしたちのくらしと商店 －コンビニエンスストアとスーパーマーケットのひみつ調べから未来のお店を考えよう」
小原 敏昭（香・浅野小）
「スーパーマーケット調べ」

- ・ 司会者 田岡 直樹 (木・平井小)
- ・ 記録者 藤岡 正樹 (木・白山小)
- ・ 指導者 森 正彦 先生

○ 11月定例会 (三豊)

- ・ 月 日 11月17日
- ・ 場 所 仁尾町立仁尾小学校
- ・ テーマ 個が育ち、生きる社会科学習の創造－学びを発信する場という視点から－
- ・ 授 業 6年「新しい日本、平和な日本へ」－東京オリンピックの開催から戦後の日本を見る－
- ・ 授業者 小西 寛 (三・仁尾小)
- ・ 提案者 萬亀 弘吉 (三・観音寺東小)
- ・ 司会者 岸上也寸志 (三・観音寺南小)
- ・ 指導者 福岡 和信 先生

○ 2月定例会 (大川・小豆)

- ・ 月 日 2月 2日
- ・ 場 所 長尾町立長尾小学校
- ・ テーマ 基礎・基本を大切にする社会科単元構想
- ・ 授 業 3年「かわってきた人びとのくらし」
- ・ 授業者 沖 肅二 (大・長尾小)
- ・ 提案者 樋本 清和 (小・大鐸小)
- ・ 6年「移り変わる社会～瓦版を発行しよう～」の実践から
- ・ 司会者 高田 宏隆 (大・福栄小)
- ・ 記録者 窪田 史子 (大・本町小)
- ・ 指導者 森 正彦 先生, 喜多 文彦 先生

2 夏季研修会

- ・ 月 日 7月27日
- ・ 場 所 高松市立新塩屋町小学校, 高松商工会議所会館
- ・ 内 容 公開授業, 分科会, 鼎談
- ・ 授業者 太田 裕子 3年「学校のまわりのお店の仕事」
別所 民康 4年「郷土を開く～上水道が町を変えた～」
大島亜希子 5年「これからの日本の農業」
佐立 茂樹 6年「徳川家光と江戸幕府～大名行列をつくろう～」
- ・ 指 導 香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 野村 一夫 先生
香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 柴田 英明 先生
香川県教育委員会事務局坂出綾歌教育事務所 主任指導主事 川中 祥照 先生
香川県教育委員会事務局三豊教育事務所 指導主事 福岡 和信 先生
- ・ 鼎 談 「新社会科学習の在り方を探る」
帝京大学教授 高野 尚好 先生
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 安野 功 先生
香川大学教育学部附属高松小学校教諭 喜多 文彦 先生
コーディネーター
高松市立前田小学校教頭 池田 孝徳 先生

平成 1 4 年度の組織

本部役員

	氏 名	学 校 名	〒 学校所在地	学校電話
会 長	古市 聖治	さ・長尾小	769-2301 さ・長尾東 9 0 1 - 1	0879-52-3181
副会長	大西 孝典	三・豊浜小	769-1602 三・豊浜町大字和田浜1000	0875-52-2029
	関根 建一	高・新塩屋町小	760-0060 高・末広町 5	087-851-2011
	松下 繁美	綾・岡田小	761-2402 綾・綾歌町岡田下 2 1 7	0877-86-3004
幹 事	大前 正昭	坂・東部小	762-0007 坂・室町 1 - 1 - 2 1	0877-46-0234
	金山 達夫	丸・郡家小	763-0093 丸・郡家町 7 9 0 - 1	0877-28-8401
会 計	植松 勝	高・附属高松小	760-0017 高・番町 5 - 1 - 5 5	087-861-7108
監 査	山下 清明	仲・満濃南小	766-0023 仲・満濃町大字吉野 7 4	0877-79-2110

顧 問

(歴代会長) 杉岡 茂 神原 萬吉 岩倉 良行 糸川 達
 東原 岩男 柳 清茂 池内 博 岡野 啓
 亀山 信夫 川田 豊弘 亀井 達男 岡田 弘治
 曾根 照正 中田 清 上川 敦生 丸野 忠義

常任指導者 池内 博 岡田 弘治 河津 學 曾根 照正
 上川 敦生 丸野 忠義

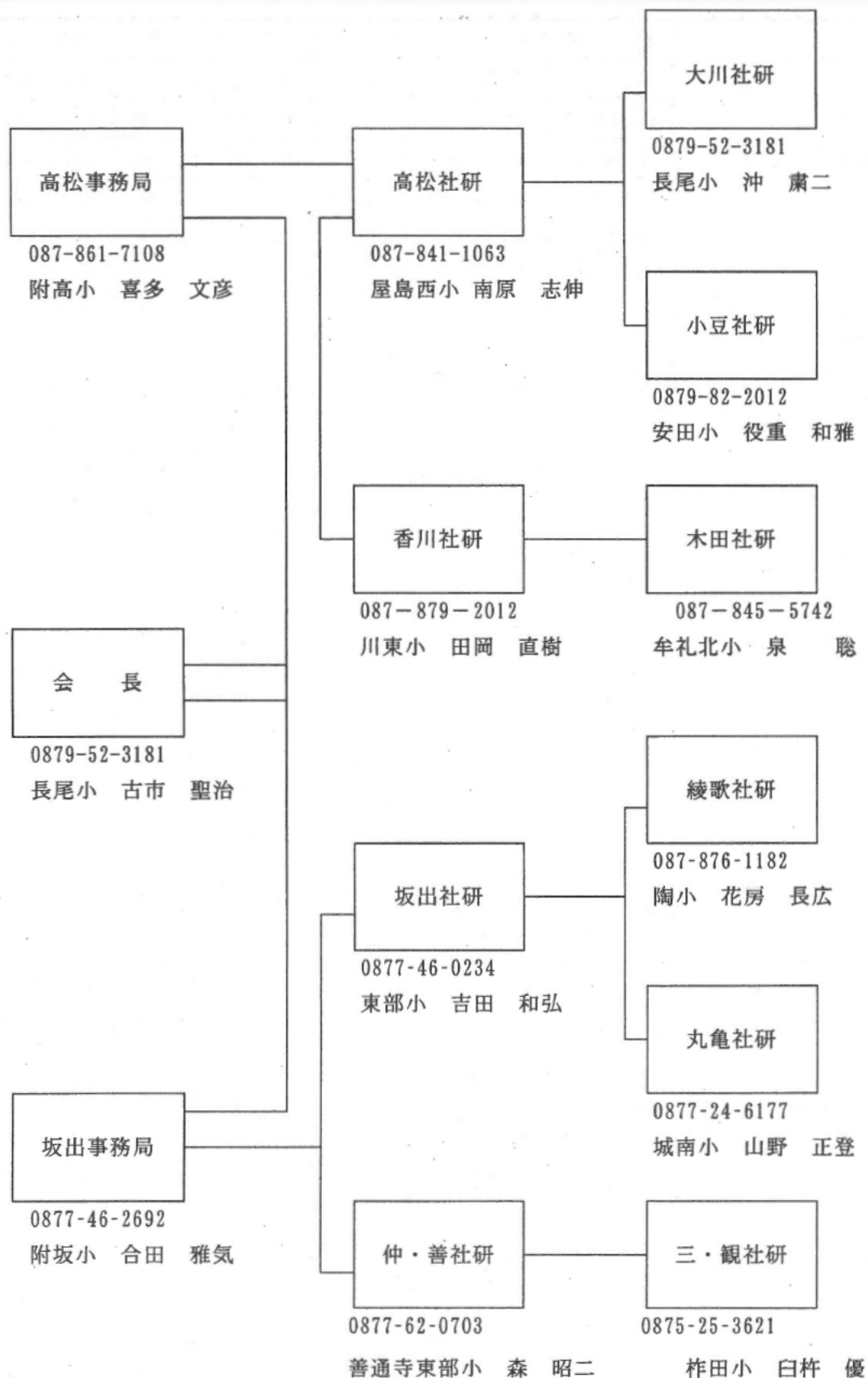
事務局 <総務> 旅田 敏弘 合田 雅気 喜多 文彦
 寺嶋 俊秀 亀井 健男 佐柳 仁

郡市理事名簿

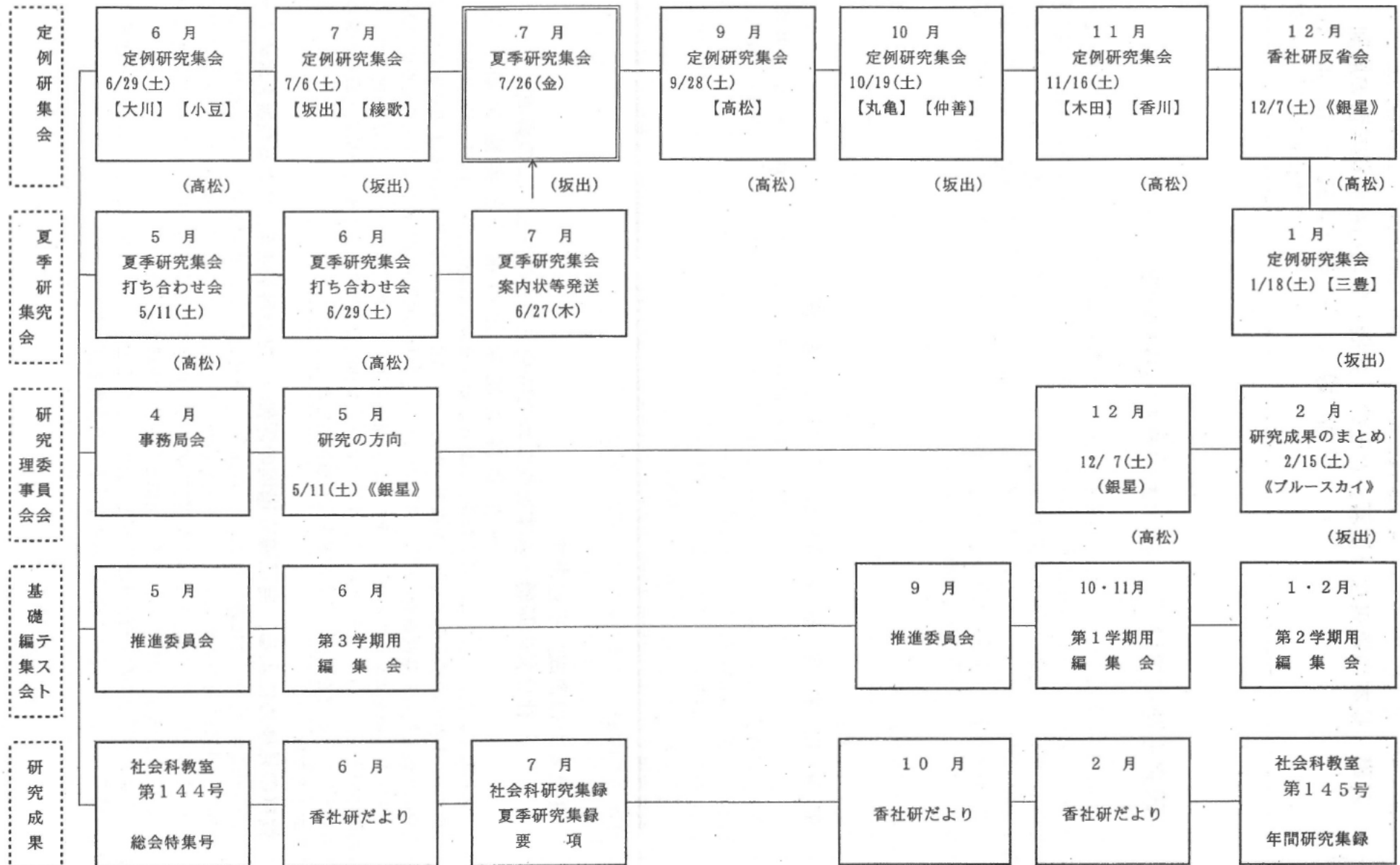
郵便番号	郡市	町名	校名	○	理事名	勤電話
760-0060	高松市	末広町	新塩屋町小		関根建一	087-851-2011
761-0322	"	前田東町	前田小		池田孝徳	087-847-6562
760-0006	"	亀岡町	亀阜小		徳田仁司	087-861-2013
761-0113	"	屋島西町	屋島西小	○	南原志伸	087-841-1063
760-0061	"	築地町	築地小		福家親夫	087-831-7188
760-0006	"	亀岡町	亀阜小		上井嘉	087-861-2013
763-0093	丸亀市	郡家町	郡家小		金山達夫	0877-28-8401
763-0071	"	田村町	城南小	○	山野正登	0877-24-6177
762-0033	坂出市	谷町	金山小		廣田秀雄	0877-46-2329
762-0007	"	室町	東部小	○	吉田和弘	0877-46-0234
761-4115	小豆郡	土庄町	戸形小		日向光徳	0879-62-0108
761-4411	"	内海町	安田小	○	役重和雅	0879-82-2012
769-2306	さぬき市	多和	多和小		八木育夫	0879-56-2002
769-2301	"	長尾東	長尾小		古市聖治	0879-52-3181
769-2702	大川郡	白鳥町	本町小		三井重彰	0879-25-3064
761-0901	さぬき市	大川町	富田小		廣瀬強	0879-43-2016
769-2713	大川郡	白鳥町	福栄小		高田宏隆	0879-27-2323
769-2301	さぬき市	長尾東	長尾小	○	沖肅二	0879-52-3181
761-0702	木田郡	三木町	平井小		藤原政志	087-898-0713
761-0615	"	三木町	小蓑小		陶山真司	087-899-1023
761-0121	"	牟礼町	牟礼北小	○	泉聡	087-845-5742
761-3110	香川郡	直島町	直島小		鴨井俊徳	087-892-3007
761-1404	"	香南町	香南小		野崎恭一	087-879-2269
761-1706	"	香川町	川東小	○	田岡直樹	087-879-2012
761-1706	"	香川町	川東小		喜岡永光	087-879-2012
761-1703	"	香川町	浅野小		岡佳代	087-889-0215
761-2402	綾歌郡	綾歌町	岡田小		松下繁美	0877-86-3004
761-2103	"	綾南町	陶小	○	花房長広	087-876-1182
766-0023	仲多度郡	満濃町	満濃南小		山下清明	0877-79-2110
764-0032	"	多度津町	四箇小		森井信一	0877-32-2517
765-0022	善通寺市	稲木町	東部小	○	森昭二	0877-62-0703
769-1602	三豊郡	豊浜町	豊浜小		大西孝典	0875-52-2029
769-1504	"	豊中町	上高野小		西谷則一	0875-62-2064
768-0040	観音寺市	柞田町	柞田小	○	臼杵優	0875-25-3621
769-1611	三豊郡	大野原町	大野原小		高橋克佳	0875-54-2029

連 絡 網

香社研連絡網



平成14年度の年間計画



研究主題

基礎・基本の確実な「定着」とその「発展」を図る社会科学習の展開

～指導と評価の統一による～

香川県小学校社会科教育研究会

I 研究主題について ～これまでの研究の経緯を振り返って～

完全学校週5日制のもと、新学習指導要領による教育が本格的にスタートした。確かな歩みのある、より子どもたちに寄り添った実践的な研究が求められている。「豊かな人間性や社会性の育成」、「自ら学び、考える力の育成」、「基礎・基本の確実な定着と、個性を生かす」、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開」をねらいとし、子どもに「生きる力」と「ゆとり」をとの提言を踏まえたこの新教育課程の中で、社会科学習をどのように展開していけばよいのか。このことを求めてきたここ数年の本研究会の歩みを簡単に整理し、本年度の研究主題につなぎたい。

【研究の歩み】

平成10年度まで

未来に生きる人間づくりの教育

～生きる力の育成を図る社会科・総合学習の展開～

各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開することの重要性が指摘された。教育課程の編成と学習内容の厳選、授業研究の在り方等の検討を求める改革が必要とされる中で、社会科はどのように変わっていかなければならないのか。また、社会科学習とのかかわりを含めて、今後の学校づくりの核となる「横断的・総合的学習」の実践をどう推進していけばよいのか。

教育現場での具体的な研究実践が求められている課題に基づいて、この研究テーマを掲げ、教育の新たな枠組みを構築し、今後を見通した実践の姿を追究した。

平成11年・12年度

「生きる力の育成」を目指す

社会科の基礎・基本を見つめた特色あるカリキュラムの編成

～社会科基底単元の構想と実践を通して～

「香川県下のどの学校もが、社会科学習の教育課程を編成するにあたり、社会科単元の基底として活用する」を目的に社会科基底単元を構想・実践した。各地域がその研究の視点や力点を定めつつも、交流の土俵を社会科基底単元に同じくすることで、全小社研の成果を広げ深めようと考えたのである。

「社会科は何を大切にするのか」を「新教育課程全体の中での位置づけや理念の具現化」という文脈の中で考え、カリキュラムづくり、1時間ごとの具体的な展開やそれを支える情報・資料の整備にも目を付けた研究を進め、その成果を実践事例集にまとめた。

平成13年度

教材の見極めによる、自己確立過程の評価 ～社会科基底単位による発展を求めて～

どの子にも「自分なりに創り上げた」、「自分らしさを確認できる」内容を見いだすことのできる「学習過程」を構想できるようにする。その学習過程を自らあるいは友達や教師により「評価」する中で、自分を主体として学ぶことの楽しさや喜びを感じ、自己意識を高められるようにしたい。この一連を「自己確立過程」と呼び、目指す授業像と設定し、実践を深めた。

とりわけ知識と経験の統一化を視座とした「できること」から「分かること」への学びの道筋を描き、感受力をもって確かに基礎・基本が定着する方策を探った。

以上のように、研究課題を確認し、その歩みを振り返ったとき、研究の大きな流れは、「新教育課程全体の中での社会科学の位置づけ」という枠組みから、基底案をもとにした「カリキュラム・具体的な展開・資料」といった指導計画づくり、さらには「自己確立過程の評価」へと進んできたと言えよう。

本年度は、これまでの研究の成果や経緯や、その過程で出てきた課題を踏まえ、

- ① より子どもに寄り添う、「学びの姿・過程」に沿った研究実践
 - 遅れて進む子や理解が十分でない子に主眼を置く指導の在り方
 - 学習を早く進め、理解も速い、次なる学習を要求する子どもへの対応
- ② 教師による基礎・基本の確かな定着の「評価」、子ども自らによる確かな伸びの「評価」
 - 結果から過程の評価への転換
 - 学ぶ主体としての自己評価の重視と自己評価力育成の方策
- ③ 実践と評価による「基底単元の修正・深化」
 - 形成過程における絶対評価を重視した評価規準としての信頼性を高める

を視点として、研究実践を進めていってはどうかと考える。

ときあたかも、文部科学省は「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を発表し、学力向上の具体的方策を打ち出した。その方策の一つが「発展的な学習で、一人一人の個性等に応じて子どもの力をより伸ばす」という提言である。学習指導要領の性格を「最低基準」と規定し直し、「発展的な学習」の積極的な導入を促している。

このような本研究会の研究の流れと、国の動向を併せてとらえ、冒頭の

「基礎・基本の確実な「定着」とその「発展」を図る社会科学学習の展開 ～指導と評価の統一による～」をテーマとして提案する。

Ⅱ 研究実践の手がかりとして

1 楽しく分かり基礎・基本の「定着」と「発展」を図る社会科学学習の構想

楽しく学びつつ分かる社会科学学習は、「できる」から「分かる」過程を重視する。そこで、ここでは「できる」ということと、「分かる（基礎・基本の定着と発展）」ことの学習の構想を述べることにする。

（1）体験的な「活動」を「学習」に高める

① 自己確立過程の重視

どの子にとっても「自分なりに創り上げる」「自分らしさを確認できる」そして、しっかりした基礎・基本を身につける内容を見いだせる「学習過程」を構想したい。さらに、その学習過程を自らあるいは友達や教師により「評価」する中で、自分を主体として学ぶことの楽しさや喜びを感得し、自己意識を高められるようにしたい。こういった願いを具現化することを社会科学学習で目指す授業像として設定し、「自己確立過程」と呼び、授業の核と設定している。

② 知識と体験の統一化～「できる」ことから「分かる」ことへの学びの道筋～

自己確立過程の重視は、子ども一人一人がよい意味での「自分の世界」を創り上げる学習への転換を意味している。この学習主体としての子どもを育てるためには、どうしても知識と体験活動の両者を、自己確立過程（学習過程）のうちに統一化させなければならない。つまり、体験的な「活動」を「学習」につなぎ、高めるのである。

ところが、現在の学びの問題点の一つとして「知識と体験の分裂」がある。体験が乏しくなっただけでなく、体験が知的な活動につながって生かされないし、また知的な活動が体験をあてにできなくなったといえよう。そこには、あまりにも性急に「分かる」ということを求めすぎた経緯があろうし、その子のもつそれまでの知を総動員して課題を乗り越える「困難」を、支援という言葉を借りて排除してきた学校教育全体の課題があろう。

これからの学習指導では、真に分かることを命題にして、「自分の体を使った（できる）」ことを、いかに「学び（分かる）」ことにつないでいくかが求められる。自分が疑問に思ったこと、楽しかったことなど感じたことを実際に次の学習活動につないでいくという過程そのものを大切にしたいのである。

子どもたちが友達や教師と一緒に対象に進んでかわる取り組みの中から、試すべき自分の感じ方なり、考え方を設定し、対象にかかわり、取り組み（操作）を経て、内容として、方法として、人間としての基礎・基本を身につけていくこと、言い換えると人間として本来豊かにもつべき「生きる力」としての「知恵」を蓄えることを学習指導の基本にする。

（２） 「できる」ことの学びの姿

子どもたちの学習が楽しく、そして主体的に展開されるためには、学習の対象である社会事象に自らの課題をもって調べていくときに、自ら「体験」「表現」などの五感を使って活動し、自分なりの見通しをもった解決をしていくことが強く望まれる。すなわち、内発的動機付けによる意欲の喚起を大切にしたいのである。子どもの主体性を重視して自己確立を目指す学習では、教師が用意した掲示資料によって画一に課題をつくり、画一に学習が進めらる外発的な動機づけによる学習から脱却しなければならない。

さて、この「できる」活動は、子どもの課題意識を強固にするとともに、課題意識の連続性そして自らが課題解決の見通しをもつことから大切であり、自己評価力を重視した学習においては欠かすことのできない要因であると考ええる。この課題意識や自己評価力を高め育てる「できる」活動には、大きく二つの場が考えられる。

一つには、単元の導入の場である。例えば、５年生の「私たちの生活と食料生産 ―野菜の生産のひみつを土づくりから探ろう―」では、単元の最初に１年生といっしょに学校園に夏野菜の苗を植えるという「できる」活動を位置づけた。夏野菜の生長を心待ちにする「意欲や体験」から「農家の人の野菜づくりへの工夫や努力」の視点を設定したり、課題を見つけるという展開である。感受力をもって学ぶことの一助と考える。

二つには、１時間１時間の導入の場である。例えば、同じく５年生の「進む国際分業 ―日本の工業に夢をえがく―」では、部品の調達や販売において複数の国にまたがった国際分業の在り方があるのではないかと前時の見通しから、子どもたち自身が企業経営者の立場に立つという「できる」活動を展開する。コンピュータ部品の調達にかかわっての会社経営を、エンカウンター法を取り入れて体験的に行う中で、技術水準や賃金などを視野に入れつつ知恵を働かせ、より安価に確かな製品を組み立てることが可能であることをつかめるようにしたのである。



（３） 基礎・基本を「定着」とその「発展」の学習から構想する

① 基礎・基本の「定着」の学習

「自己確立過程」による授業像は、子ども一人一人が自分の世界を創造しようとする学習観に立つ。子ども一人一人が、「外から得たものを、違った感覚として、違った仕方では何か一つのものとしてつかむ」過程としての学習観である。子どもたちが、自ら得た基礎・基本の事項や内容を自分なりの感じ方、考え方で問い直し、事象と知識との関係を把握する意味理解と、自分自身のことも視野に入れながら考えを深めることによって、自分独自の個性やアイデンティティを創造することとに価値をおく。

そうした自己確立過程を基礎・基本の確実な定着という側面から見たときに、二つの過程を考えることができる。

一つは、自分やクラスの子どもたちが調べてきた社会事象を協定・共有化する過程である。情報や事実の中から、課題の解決につながる^①「基礎・基本の事項」を選び出し、自分の文脈や知識構造に組み入れる前提をつくる段階である。

二つ目には、自分や友達が調べた事項を「思考と表現」の場を通して吟味・解釈し「自分なりに」関係

・意味づけながら全体として「自分らしさ」を確認できる^②「基礎・基本の内容」に高めていく過程がある。協定・共有化した事項に対する個によって異なる軽重のかけ方・関係づけの違いを経て、自らが内容を創り上げていく段階である。

これら二つの過程を通ることが、基礎基本の確実な定着につながる、言い換えると、最低基準を示す学習指導要領にそった学習ととらえることができる。

このような二つの過程を基礎・基本の定着と位置づけたとき、

- 貧弱な事項からは、豊かな内容が生まれない。
- 画一的な事項からは、自分らしい内容をつくるのが難しい。

とのことが導出され、自分らしい内容をつくる、多様な学習方法を生み出す教材の在り方も同時に模索されなくてはならない。これについては、3で詳述する。

② 基礎・基本の「発展」の学習

学習指導要領は最低基準を示してあることからして、一人一人の基礎・基本を考える上では、発展的な内容も視野に入れた学習が必要である。ところが、最低基準のところを基礎・基本と呼び、その発展の学習のところは基礎・基本ではないとしたら、どこまでが基礎・基本なのかその線引きに論議が費やされるであろう。

学習指導要領は、最低基準を示したものであり、それを超えるところはそれぞれの学校で考えるとされている。しかし、基礎・基本をどう規定するかは不明瞭な部分が多い。

本研究会では、基礎・基本は誰にとっての基礎・基本なのかという原点に立ち、「子どもにとっての基礎・基本」であることから、次のようなとらえ方とした。すなわち、学習指導要領にある最低基準の層は、「定着学習」と呼ぶ。前項で述べた「基礎・基本の事項」から「基礎・基本の内容」へと高め、自らが内容を創り上げていく自己確立過程の層である。

一方、学習指導要領を超えた基礎・基本の層は、基礎基本の「発展学習」と設定する。こうすれば、子どもたちにとっての基礎・基本は、「定着学習」で終わる子も「発展学習」までいく子も、どちらになってもその子にとって基礎・基本となると考える。自分を主体として学ぶことの楽しさや喜びを感得し、自己意識を高める、「自己確立過程」を通しての基礎・基本なのである。

③ 「発展学習」の四つの方向性

では、その子にとっての基礎・基本はどういった方向に「発展」していくのであろうか。これについては、次の四つととらえている。

I 概念を確固とする（学習過程の重層化や、事例選択による発展学習）

その子の基礎・基本が、「事項から内容」へとつくられていることからして、事項の数を増やしたり、多様にしたりして、内容をより豊かにえがくという発展の方向を設定することができる。具体的には、野菜づくりに従事している人々のこだわりや誇り、工夫を「土地の自然条件、栽培の手順、品質を上げる工夫」からつかんでいった子どもが、さらに「消費者の需要に応える流通体系」も入れて内容とするような例が挙げられる。

このようにして、概念をより確固とするものにする発展の方向がある。

II 観点変更（創造的な思考力育成を図る発展学習）

空間的な広がりや、時間の経過などをもとに、観点や考え方を変えて自分の基礎・基本を見つめ直し、深めるという方向を設定することができる。上述の野菜づくりに従事する人々の学習を例に取り上げると、「他県での産地では同じことがいえるだろうか」、「外国の例で共通点は探れないか」、「過去からとらえたとき、変化してきたところと、変わらないところはどこか」と学びを広げたり、深めたりする。

物事を多面的にとらえたり、豊かで柔軟な発想ができる子どもづくりを進めていく上で重要な方向性である。

III 学び方の質を高める（学び方を変えることによる発展学習）

同じ情報をもとにして整理、処理を進めていくのでも、収集の仕方が教師から与えられるのと、自ら選択をするのでは、学習にあたっての困難さが異なってくる。最低基準としての基礎・基本の定着のためであれば、ある子どもには資料を与えることも必要となる。逆に、発展的に進む子どもには、自分で必要な情報を見つけられるように環境設定をしたり、情報収集そのものに携われるような場をつくることができ

よう。

このことを例にして、同じ学び方でも、より発展的に、困難を乗り越える喜び、充実感を味わえる方向性がある。

Ⅳ 個性化を図る（課題設定による発展学習）

学習スタイル・認知スタイルとしてのその子のよさを発揮するという発展の方向がある。イメージでとらえることが得意である、言語で思考することを好む、感覚的に全体的に事象をとらえる、論理的に筋道を立てて考えを進めるなど、その子の特性、個性に応じて多様な学習を考えることができる。

また、学習の結果として得たことを文学作品にまとめたり、音楽をつけて発信するなどという個の才能伸長と関連した発展も可能である。総合的学習における知の総合化・知の実践化にもつないでとらえる方向性がある。

（４） 基礎・基本の「定着」とその「発展」を層的にとらえる

その子にとっての基礎・基本という観点から、「定着学習」と「発展学習」について述べてきた。ここでは、それらをまとめ、図も含めて整理をしておきたい。

既に、基礎・基本の「定着」については示しているが、この層には、基盤として読み・書き・計算という「生活力の基礎」も求められるところである。繰り返してドリルを必要とする技能の徹底、記憶をするということの重要性は忘れてはならない。これを基礎・基本の定着の一つ目の層に置く。二つ目の層は、学習指導要領の内容を定着するための学習である。前述した事項から自分なりの内容をつくりあげる自己確立過程の中核となる層である。三つ目、先の二つの層の上に超える学習としての「発展」と「総合的学習」を位置づける。

これら三つの層の内容・学び方・学習類型はそれぞれどうあるべきなのかを図化したものが、下である。

☆基礎・基本の定着と発展の学習

	基礎・基本のとらえ	内容	学び方	学習類型
Ⅲの層 学習指導要領を超えた 基礎・基本 教科での発展 総合学習へ発展	基礎・基本の 「発展学習」	(知的) (技能的) 1 社会的事象の深まりのため に事項を増やす。 2 他の事象に発展する	思考力 判断力 表現力	課題設定学習 課題選択学習
Ⅱの層 学習指導要領（事項と内容） （最低基準）	基礎・基本の 「定着学習」	○学習指導要領の内容 による		課題選択学習 反応類型学習
Ⅰの層 生活力の基礎 「読み・書き・計算」	生活の基礎になる学力は 繰り返し・ドリル（習熟） を必要とする。	○教科書		

その子にとっての基礎・基本を
考える。

(5) 具体的な学習指導過程をえがく

以上、楽しく分かる社会科学学習の構想を、体験的な「活動」を「学習」に高める「できる」ことから「分かる」ことを重視した過程と、基礎・基本の「定着」とその「発展」という点から記してきた。ここでは、これらを整理し、具体的な指導過程として図にして集約する。その際、一般的な従来の授業を併記して、主張を明確にしたい。



2 指導と評価の統一による個の育ちを促す教育技術の探求

「自己確立過程」を目指した学習は、形成過程における自己評価を重視する。それを前提としたとき、楽しく分かる学びの形成過程で自己評価力を高める必要がある。この点から研究実践への手がかりを述べることにする。

(1) 形成過程における自己評価

① 形成的評価と絶対評価・相対評価

学習指導要領の改訂や評価の改善が示され、学習の到達度を評価するための評価規準表の作成、評価方法等の研究開発が求められている。

しかし、評価規準は結果としての到達目標は示しているが、それまでの過程について十分示しているとは言えない。評価が教育的なものとして実施される以上、教育活動の最終的な判定としての役割だけでは不十分である。そこで、最終的な結果に至るまでの学習の形成過程において、子どもの学習活動や教師の指導の改善に利用される評価、つまり形成的評価が必要となってくるのである。

形成的評価からの情報によって、子どもは自己の学習を改善したり、繰り返したり、深めたり、広げたりして学習の効果を高めつつ自己を形成していくことができる。また教師は、子どもの学習の習得状況を見て、学習活動の修正や補充、発展の必要性を見極めるとともに指導計画の改善を図ることが可能になる。

そして、これらの評価が適切に行われるためには、子どもの活動を中心においた評価の考え方と観点別学習状況の評価を中心に据えて、子どもの学習活動の過程や成果などを継続的に把握することが必要となる。

また、子どもの活動を中心においた評価のためには、子ども一人一人が伸びていこうとする意欲や活動、その成果に対してよさを認め、さらに伸びていくための方策を考え、自己実現へと結びつくための支援を行うことが必要である。それにより、子どもが自らの学習過程を自分自身で見つめ、評価し、次の段階の取り組みに生かしていける自己評価力を高めていくことができるのである。

ここでは、まず、形成過程における自己評価の姿を単元全体あるいは1単位時間の学習の中に位置づけ、絶対評価と相対評価のかかわりの中で、子どもが主体的に自己評価を進めることができる社会科学習の評価の在り方を探っていきたい。

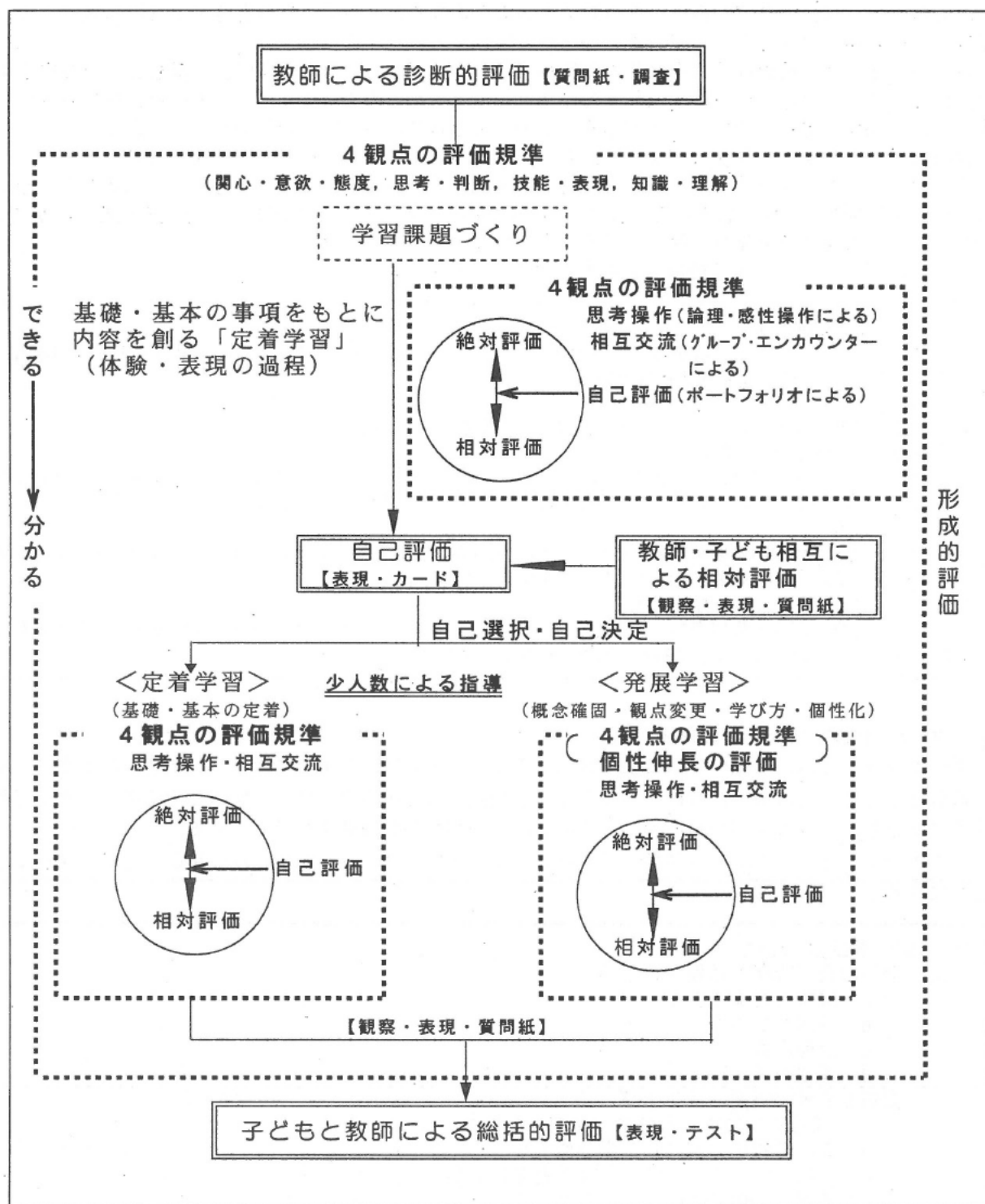
② 絶対評価に相対評価を加味する

絶対評価は、子ども一人一人が期待される目標値にどれだけ到達したかを判定し、その判定に基づいて価値判断をすることである。この際、先に述べた目標値となる評価規準を作成しておかなければならない。この評価規準は具体的に子どもの個々の学習の姿が把握でき、指導に適切に役立たせるものでなければならない。これにより、指導と評価の統一を図ることが可能となる。

しかし、この評価規準が任意に定められると、到達目標に対する教師間の考えのずれが生じ、独善的に陥る危険が生じる。そこで、評価規準さえつくれば評価ができると思い込むのではなく、評価規準を活用する方法こそ重視すべきである。そして、常に相対評価を加味するよう活動の場を設け、集団の中で他と比較、交流しつつ個の評価ができるようにすることが求められる。この絶対評価、相対評価には、観察、記録、テストなど教師側が行うものと、子どもが自己を評価したり、それを教師が他の考えを知らせるなどの援助をしたりして行う自己評価とがある。

(2) 形成過程における評価のモデル

楽しく学び分かる学習過程として「できる」から「分かる」形成過程における評価のモデルが次頁の図である。まず単元展開に当たって予備調査としての診断的評価が行われる。これは、主に学習の前提となるレディネスが形成されているかどうかを把握、判断し、教師側の指導計画作成のために活用されるものである。そして、学習活動（基礎・基本の事項をもとに内容を創る定着学習）を通して、4つの観点別評価規準に沿った評価情報（相対評価を加味した絶対評価とともにポートフォリオを活用した自己評価）により、「定着学習」と「発展学習」に進んでいくための自己評価を経て、子どもと教師による総括的评价が行われる。この総括的評価は、活動の結果に関するデータを価値判断することに主眼がおかれる。教師は、この総括的評価によって、カリキュラムや指導方法などの実践を反省し、今後の実践を構想していく。



(3) ポートフォリオで自己評価力を育てる

子どもが自己評価を行い、自分の思考の流れを見つめていくためには、ポートフォリオの活用を重視する。それは自己評価力を高めていく鍵になると考えるからである。そこで、ポートフォリオとその活用による評価について述べておく。

① ポートフォリオの特色

ポートフォリオとは、目標をもった子どもの主体的な活動における、豊かな感情をともなった子どもの努力や進歩と成果を自分と他者に示した一連の作品集録である。それは、指導・学習と評価の一体化を図り、自己評価を軸にした評価である。集録といえば、たくさんの記録を集めるだけになってしまいがちであるが、ポートフォリオはそうではなく、「自分の学び」への目に見える形での蓄積である。

すなわち、ポートフォリオの作成過程こそが重要なのである。ポートフォリオ作成過程を通して、子ど

もたち自身が、自分の学びの高まりを自覚できるようになるとともに、自分自身のよさにも気付くことができる。それが学習することの楽しさにつながっていく。

ポートフォリオ作成過程は、単なる作品集録ではなく、子ども自身による学習の改善と向上の作業集積の過程であり、作品などの資料を収集する作業としてとらえるのではなく、子どもの創作物に表された内容の把握や創作の過程における、子ども相互や子どもと教師の対話的な評価の場なのである。

教師はポートフォリオを使って子どもたちにどんな力をつけさせたいのかを計画的に考えていなければならない。ポートフォリオには、子どもの学習の流れや過程がはっきり分かるという利点がある。そこから、子どもの論理的思考の高まりであったり、悩みや願いであったりと多様なものを読み取ることができ、一人一人に目を向けた的確な支援もできるようになる。

ここで、ポートフォリオの特色を箇条書きで挙げておく。

ア 子どもに情報選択権

ポートフォリオのデータ収集は、自分の学習の成果と能力の責任を負うことから、教師と子どもが協力して作成する中で子どもに情報選択権がある。

イ 学習の自己評価

学習の進歩や成果とポートフォリオの内容を振り返ることが重要である。

ウ 情報作成と情報選択の創意

ポートフォリオに組み込む内容の作成と選択が自己の学習の進歩と成果につながるよう創意しなければならない。その創意のための手だてを発達段階に応じて開発しなければならない。

エ 整理と活用

ポートフォリオの内容を、学習に生かしつつ、次なる学習の基礎・基本の学力として活用できるよう、整理の仕方と整理の時間確保（学級活動など）をする必要がある。

オ ポートフォリオの形態と名前づけ

作文、写真、調査・観察資料、読み物、インタビューのテープ、ビデオテープ、フロッピーなどを入れる箱やファイル、袋リストなどに名前（知恵の箱など）をつけておく。

② ポートフォリオによる学びの評価

ポートフォリオは、作品の収録による評価であるが、それは、今までに繰り返して述べたように、単に学習収録したものではない。収録することに自己発見・自己実現の「学び」があるのである。そこで収録するにあたり、どんな学びがあるのか、その学びの姿が分かれば評価が見えてくる。

そのポートフォリオによる「学び」を「個の学び」と「集団と個のかかわりの学び」とから探ってみることにする。

ア 「個の学び」について

あ 学びの自己管理の過程での学び

- a 目標を明確にする
- b 計画をつくる。
- c 活動する。
- d 達成を振り返る。

い 認知と情動の機能による学び

- a 課題について、自分は何が知りたいか。
- b この情報をいかにして学び取るか。
- c それについて、どのような活動をするか。
- d 情報の処理方法は、どんなに工夫するか。
- e 成果の評価と成果に至る過程はどんなに自己評価するか。

う 進歩と結果（成果）を確かめることを計画し、実践する学び

- a プロセスを振り返る。
- b 結果を確かにする相対評価により、伸びに喜びをもつ。

イ 「集団と個のかかわりの学び」について

- a 自らの学びを理解し、他者にも理解してもらう。
- b 情報を明確に簡潔に伝え合う。
- c 効果的な意思疎通の方法を工夫する。
- d 多様なポートフォリオをもつ仲間と交流し認め合う。
- e 自らの意見をもち、ポートフォリオに組み入れて、自己評価する。

このようにポートフォリオにより、個の学びと集団と個のかかわりを学んでいくことで、自己評価が深められていく。では、どんな自己評価力が育てられるといえるのだろうか。項目を挙げておこう。

- | | |
|---|---------------|
| ア | 興味・関心・態度の強化 |
| イ | 総合的な思考・判断・表現力 |
| ウ | コミュニケーション能力 |
| エ | 情報活用能力 |
| オ | 課題設定能力 |
| カ | 自己の生き方を思索する能力 |

(4) 自己確立過程の評価にあたって

新しい学習指導要領のねらいを実現するためには、各学校において、子どもや地域の実態に応じて適切に教育課程を編成・実施するとともに、指導方法の工夫等を行うことが重要である。それに加えて、子どもの学習状況や教育課程の実施状況を適切に評価することもきわめて重要である。

評価の基本的な考え方として、目標に準拠した評価すなわち「絶対評価」を一層重視し、指導と評価の一体化や評価方法の改善を図るとともに、学校全体としての評価の取り組みを進めるよう方向が示された。

「自己確立過程の評価」という研究テーマとのかかわりも含め、今後の研究実践の手がかりとなるポイントをさらにいくらか示しておきたい。

① 評価の「客観性」と「指導性」

個人内評価、絶対評価、相対評価の三者にはそれぞれに長所と短所が混在している。

◎ 指導的な見地を中心として考えると、教育的な配慮が行き届く反面、教師の主観的な判断に委ねられることになり、評価の客観性が損なわれやすい。

◎ 客観性を中心と考えると、測定的な評価によって客観性が備わる反面、児童生徒の動態的な学びの姿が読みとりにくく、その後の指導の有効性に難点が生じやすくなる。

今回、相対評価をはずし、「絶対評価」に変更したことについては、「到達度を客観的に測る絶対評価」という表現になっている。この点の背景も十分に咀嚼して理解しておく必要があるとともに、教師による基礎・基本の確かな定着の「評価」にあたり、その観点・規準や方法を考える根本としておきたい。

② 指導と評価の一体化 学習と評価の一体化

評価は、ややもするとそれ自体が目的となり、評価のための評価に終わってしまいがちな面が多くみられてきた。その点を考慮すると従来強調されてきたように、評価は指導と一体となるものでなければならない。今回の答申でも「指導に生かす評価をより充実すべきである」とされているとおりである。

昨年度のテーマ「教材の見極めによる、自己確立過程の評価」に基づく研究実践、ならびにそれに引き続いた本年度の研究実践は、子ども一人一人がよい意味での「自分の世界」を創りあげる学習への転換、学習主体としての子どもを育てることを求めるものである。その意味から考えると評価の主体に「子どもたち自身」を置き「学習と評価の一体化」を目指すことも肝要になってこよう。

本来、評価とは学習過程の一部をなすものであり、その主体は学習活動の主体と同一であるのが道理である。「生きる力」の育成を至上目標とする新教育課程では、学習活動だけでなくその評価をする主体も子どもにすることということも視野に入れておく必要がある。その際、教師には、子どもが自力で適切な評価を行えるよう、計画的かつ組織的に支援することが求められる。

③ 学習の過程を重視する～その子の成長のリズムを視野に入れて～

まず、子どもの学びや育ちの状況がある程度のスパンで見取っていく必要がある。そして、学習過程を

最大限に重視するとともに、単なる評価要素の総和をみるのではなく、それらの相乗効果を見取っていく動態的なとらえ方が必要である。

そのために、子どもの表現物やノートの記述、学びの途中の記録などを十分に活用し、その中に表れた子どものよい点、意欲的な態度、進歩の状況などを丹念に見ていきたい。このような記録の活用によるポート・フォリオ法などの有効性が学校全体の実践として報告されるようになっていく。

さらには、もっと長期的に子どもの学びや育ちの状況を見取って、子ども一人一人の成長のリズムの違いを考慮に入れた評価の在り方も研究できよう。「右肩上がりの一直線」の発達・成長モデルばかりでなく、ゆるやかな「らせん型」、行きつ戻りつする「ジグザグ型」、「一気集中型」など、一人一人異なる成長のリズムがあると考えたとき、その子の学びへの評価、それに基づく指導・援助は、また異なった展開を見せるであろう。

④ 自己との対話を深める

どんな内容知や方法知が習得できているかという状況の評価には、到達度型の評価方法も利用できるが、子どもの問題解決過程や探求過程にかかわる評価、とりわけ子どものよさや可能性に焦点化する評価には、自己評価や相互評価、ポート・フォリオ法などが有効である。

自己評価が利用される理由は、子どもが学習する主体と成長するためには、評価の主体も学習者自身の手に戻していくことが、より教育の論理にかなっているためである。

「生きる力」の育成や自ら学ぶ力の習得にとって、絶えず自己を見つめ、自己を変えていく力すなわち自己評価の能力はその中核であり統合的部分であるといえる。仲間との相互評価は、自己評価の規準設定に役立つだけでなく、他者のよさに気づくことを通して、新たな自己の発見と結びつく。学習の過程（自己確立過程）で、自ら収集し、記述し、保存し視覚化した情報に基づいて子ども自らが、自らの学習活動を評価する観点や方法をさらに開発していきたい。

⑤ 複数の教師による評価を試みる～「少人数指導」の在り方への提言～

少人数指導にかかわって、複数の教師が協同して子どもたちの指導にあたるようになってきた。社会科でも「課題別グループ」、「追究方法別グループ」に分け、教師が「分担して子どもを観る」実践が展開されている。今後こういった実践の研究を深めていくことが大切と考えている。

ところが、こういった実践を「子ども理解」という評価の視点で見たときに、いくら少人数になってもその子への固定的な見方が変わらなければ、場合によっては「思いこみや決めつけ」による支援が進められていたのではないかと反省することもできる。

今後は、協同的な多面的な子ども理解に立った支援も展開していきたい。具体的には、例えば複数の教師が話し合っ、その時間に特にかかわりをもっていく子どもたちを数名決め、活動の様子から見取ったその子たちへの「観」を記録しつつ評価する。授業後、記録を活用しながら、お互いの見方・その子への思いや願いを出し合う。意見の相違に対しては自らの「観」を反省的に見つめ、共通したことに対してはより確かな今後のかかわりへの方針とする。このような子ども理解に立つ「チーム指導」の在り方を求める中で「評価」を考えていきたい。

⑥ 外部からの評価情報も取り入れる

例えば、地域のくらしの様子の変化や生産や販売に携わる人々の工夫の学習などでは、地域の方々や保護者がアシスタントとして学校に来てくださることが多い。このような場合、地域の人材との打ち合わせ会をもちたいものである。特に事前に評価の観点についても話題として取り上げておくと、授業後にはそれだけ幅のある有効な評価情報を収集することができよう。

とかくこれまでの学校では、「評価」は教師特有の職務と考えられがちで、学校や教師の権威を守ろうとする思いから、今も閉鎖的に考える傾向がないとは言えない。

しかし、「開かれた学校」を一層促進する意味では、思い切って外部からの評価情報を取り入れるようにもしてみたいものである。

3 研究実践の手がかりとしての具体の授業像

5年単元 進む国際分業 — 日本の工業に夢をえがく — より

(1) 本実践の概要

本単元全体の中心概念は、

現在と今後を見つめたとき、日本の工業は、原材料・部品の確保、製造の過程、製品の輸送などの面から、複数の国にまたがった多様な分業体制になっている。この国際分業の時代に入り、貿易や運輸の働きが工業生産にあたってより重要性を増しているとともに、国際分業時代にあたって日本がしっかりした位置を保つためには、職人としての「モノづくりの技」を確かに受け継いでいくこと等が必要である。

本単元は、日本の製造業において進展している「国際分業」という現在の状況を単元化することによって、依然「原材料を輸入してそれを加工して輸出する」を基本として教材化していることへの指摘とし、教材の見極めの在り方を提案するものである。

① 「日本産業の新たな展開」と現在の「教材」とのずれ

現在の社会科教材の記述をみると、次のような内容を骨子としているものがほとんどである。

日本は、原料や燃料をたくさん輸入しています。一方、輸出品をみると、自動車、事務用機器、鉄鋼などの工業製品がほとんどです。このように日本の工業は原料や燃料を輸入し、さまざまな製品に加工して、国内で販売したり、外国に輸出したりしています。

つまり、加工貿易を前提とした工業生産の在り方を基調として、「我が国の工業生産や工業地域の分布」、「工業生産に従事している人々の工夫や努力」、「工業生産を支える貿易や運輸の働き」がとらえられるようにしているのである。イメージとして輸出入品の割合を頭に描くとすると、輸入品のほとんどは原材料であり、輸出品は機械等で占められるのではないだろうか。ところが、実際は、1980年代以降、輸入構造を割合で見ると半分以上が製品であり、原料品の割合は激減している。加工貿易をキーワードとする基調は明らかに1980年代のものなのである。

② 社会科教材における「不易」と「流行」

新学習指導要領下における教材は、内容も新しくなくてはならない。そうでなければ、時代に合わない内容を依然学び続けなければならない状況となり、社会を見る確かなものさしを創り上げていくことにはつながっていかない。たぶん今後の教材の主流は「最近では、テレビなどの電気製品や衣類、自動車、コンピュータなど、製品の輸入がふえてきました。」といった表現がみられるようにはなると考えられるが、その際に授業をどう展開していけばよいのかが本実践の一つの提案である。

こういった社会科学学習の宿命としての「時代の変化」すなわち「流行」への対応がある反面、常に変わらないものを見つめるという「不易」への視座ももたなければならない。本実践で、産業構造の変化として取り上げた「国際分業」もまた、時代とともに変わり、新たな状況が生まれてこよう。目に見える社会的な状況が変化し、発展しようとも、それを自分なりに分析して諸関係や相互のつながりを明らかにしたり、一見切り離され独立しているかのように見えても、構造的につながりや関係を見抜いたりしていく「社会的なものの見方・考え方」の広がりや深まりが求められなければならない。

本単元においていえば、もちろん流行としての現在の状況である「国際分業」への理解は、基盤に置く。けれども、それだけではなく、この「国際分業」の学習を進めることを通して日本の工業が「宝」としてもち続けなければならないものは何なのかなどに目を開いていけるようにしたいと考えた。

(2) 本実践での取り組み

① 社会科の本質に迫り、基礎・基本を現在の社会の状況に対応して設定する

1980年代中盤あたりから日本企業のアジア各国地域への進出が目立つようになり、製造業は国際分業時代に突入した。昨今では、その分業体制もアジア諸国が一次産品を輸出し、それを輸入した日本が工業製品にして輸出するという垂直分業から、互いに工業製品を輸出しあう水平分業に変化してきている。日本からインドネシア、シンガポール、タイといった地域までをカバーする範囲は、アメリカ合衆国やヨーロッパに匹敵するかそれよりもせまい範囲の地域である。しかも、海でつながっていることで陸上輸送に比べて多くの物資を低コストで輸送することが可能である。また、域内に高賃金で高い技術を備えた国から、低賃金国まで多様な国を抱えていていろいろな形の分業を構築することができる。国際分業時代の突入は、産業の「空洞化」の論議と併せられ、ややもすると悲観的に語られがちである。しかし、広範で多様な分業が可能なので、知恵を生かすことで明るい展望を開くことも可能である。このことを「アジア圏の協同」の視点として子どもたちが体験的に企業経営する「できる」活動から「分かる」活動へと進む中で、日本の工業に対して夢をもちながら学べるように単元構成を行った。

また、機械化により基盤技術・組み立て技術がアジア諸国地域内で平準化している現在、日本がその中でしっかりした位置を保つためには、付加価値の高い最新研究面での特殊技術に磨きをかけると同時に、職人としての「モノづくりの技」を確かに受け継いでいくことが必要であることにも、興味をもち発展的に学ぶ子どもたちは気付けるようにして習熟度別コース（発展学習）の設定を行った。

② 課題意識と「できる」ことから「分かる」ことが連続する単元構成

子どもたちは、2学期に水島の自動車組み立て工場の見学を行っている。できた自動車が港から外国に運ばれることから、日本は工業製品を外国に輸出することを基本としているという意識をもっている。しかし、「我が国の商品別輸入構造の推移」を丹念に追うよう単元の冒頭に働きかけることで、原料品の輸入は激減し、代わりに工業製品の輸入が6割を超えるまでに至っていることをつかむ。身の回りの製品を改めてみても、日本企業のブランドがついているにもかかわらずアジア諸国地域内で生産されているものが意外なほど多いことを発見する。これらのことから、「日本の製造業の現在」を課題とする調べを展開し、単元を開いていく。

次に、子どもたちにも入手しやすい資料から、日本の海外生産の様子を自動車や電気製品などを例に探る。その中で技術レベルと賃金等による地域的な違いを生かして生産立地を選択していく「国際分業」の在り方にふれていく。ここでは、他国との協調・貿易摩擦の解消という視点も含めた追究となるよう、他国の立場を考えるとという了解的手法を取り入れる支援を行うと同時に、部品の生産を行っているという個の発見を顕在化し、新たな国際分業の在り方があるのではないかという次なる見通しがもてるようにした。

そして、部品の調達や販売において複数の国にまたがった国際分業の在り方があるのではないかとこの前次の見通しからコンピューターの生産などの様子について確かめる学習を展開する。ここでは、子どもたち自身が企業経営者の立場に立ち、各国の会社経営をエンカウンター法を取り入れて体験的に行う中で、技術水準や賃金などを視野に入れつつ知恵を働かすことで、より安価に確かな製品を組み立てることが可能であることを確かめるようにした。国際分業のよさと可能性を感受し、夢をもって製造業をとらえることができるようにしたのである。本次では、社会科を研究教科とする教官とのチーム指導を展開した。日本の工業の将来について関心をもち、その構想を小学生なりに行っていくという発展的な学びの支援を行うためである。また、「同じ子どもを二人の違った眼で観る」を基本とした確かな子ども理解を進めるという点からも協同し、「思いこみや決めつけ」のない多面的で豊かな支援を進めていく。

(3) 本実践の単元構成と評価規準

単元名 進む国際分業 ―日本の工業に夢をえがく―

(全7時間)

第1次 (1時間)
◎身の回りの工業製品を見直し、工業生産における外国との関係について調べる計画を立てる。

○自動車をつくる工業で学んだ現地生産の在り方、広がる工業地域でもったさらなる展開への見通しをもとに、単元への意欲をもつ。(関・意・態)
○身の回りの工業製品を見直してみると、日本企業のブランドがついているにもかかわらず、アジア諸国域内で生産されているものがたいへん多い。(知識・理解)

現在と今後を見つめたとき、日本の工業は、原材料・部品の確保、製造の過程、製品の輸送などの面から、複数の国にまたがった多様な分業体制になっている。この国際分業の時代に入り、貿易や運輸の働きが工業生産にあたってより重要性を増しているとともに、国際分業時代にあたって日本がしっかりと位置を保つためには、職人としての「モノづくりの技」を確かに受け継いでいくこと等が必要である。

第2次 (3時間)
◎日本の海外での生産を自動車や電気製品を例にして調べ、地域的なちがいを生かして生産立地を選択する「国際分業」についてまとめる。

○充実コースでの学習により、日本の工業の歩みを「国際分業」を入れて整理しようとする。(関・意・態)
○発展コースでの学習により国際分業では、その国の文化・習慣への配慮の重要性を考えようとする。(関・意・態)
○同じ電気製品でも、国によって作るものが違うのには、きっと理由があるのではないかと推測し、論理的に明らかにしていこうとする。(思考・判断)
○製品ごとにどこで何がつくられているかを表す「国際分業地図」を作成する。そこから問いをもつとともに、既習事項や統計資料から国際分業の要因を見いだす。(技能・表現)
○日本の会社は、電気製品や機械、自動車などを各地で生産している。そして、つくったものをその国で売ったり、日本に輸入したりしている。これを国際分業と呼ぶ。(知識・理解)
○国際分業では同じ電気製品でも国によって作るものを変えている。(知識・理解)
○国際分業を進める要因には、価格、その国の技術力、国際協調等、国内の工場立地とは異なる要因がある。(知識・理解)

第3次 (3時間)
◎国際分業には、部品の調達や販売においても複数の国にまたがったものがあることを、コンピュータの生産などを例にして調べる。コース別に学び、これまでの調べを確かなものにしたり、日本の工業の将来を構想したりする。

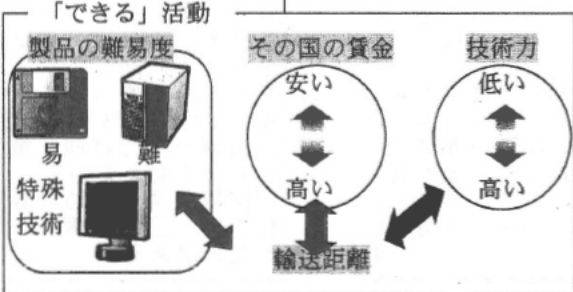
○多様なコンピュータの組み立てができることから、国際分業の可能性を感じ、今後にも夢をもつ。(関・意・態)
○コース別学習によりパソコン以外の製品の国際分業の在り方を考えようとする。(関・意・態)
○コース別学習により国際分業が進む中、日本の製造業の将来を構想しようとする。(関・意・態)
○各種の基礎的資料から、製品の難易度やその国の技術力などを類推し、論証に生かそうとする。(思考・判断)
○多様なコンピュータの組み立て方があることから、自分と他者の感じ方、見方や考え方のちがいや、そのよさを感じる。(思考・判断)
○製品の難易度や技術力、輸送距離を推測させる資料をもとに、コンピュータの組み立てを「国際分業地図」にあらわす。(技能・表現)
○国際分業時代にあたって、日本はどうあればよいか、自分なりの考えも入れて文章にまとめる。(技能・表現)
○国際分業では、製品によって生産場所が異なるだけでなく利用される部品においても生産の立地がアジア諸国地域の特性を考慮して選ばれるという「国際分業」が進んでいる。(知識・理解)
○価格や技術力など、第2次で見つけた要因を組み合わせると、多様な生産ができるので、知恵を生かすことで工業に明るい展望がもてる。(知識・理解)
○国際分業時代にあたって日本がしっかりと位置を保つためには、職人としての「モノづくりの技」を確かに受け継いでいくこと等が必要である。(知識・理解)

(4) 本時の学習を指導案で示す

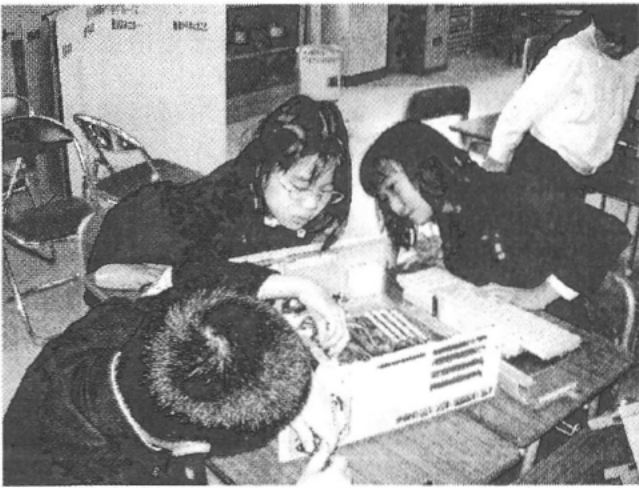
(1) 目標

- ・ エンカウンター法を生かした体験的に企業経営するという「できる」活動を通して、電子機器の場合には、製品によって生産場所が異なるだけでなく、利用される部品においても生産の立地がアジア諸国地域の特性を考慮して選ばれるという「国際分業」の構築がなされていることを感受力をともなって「分かる」。
- ・ 国際分業の形態についての概念を確固としたり、今後の製造業の進展の方向を構想したりするという発展的な学び方を、形成的な自己評価にもとづきコース選択して展開することができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	本 質 に 迫 る 認 知 構 造 の 変 容	援助活動と評価				
1 本時の見通しに対する自分の考えを発表する。 2 その国の技術・賃金、部品生産の難易度、輸送距離を視点にして各グループでパソコンの生産立地を話し合い、「国際分業」地図に位置づける。 (1) 各自でポートフォリオから統計資料等を探して視点ごとのデーターを集める。 (2) 各自のデーターを調整しながら、各グループで部品をどのように調達するか話し合う。 (3) 各グループで「国際分業」地図を作製し、交流して互いの違いについて深める。 3 「国際分業」についての新たな問いを整理し、コース別に分かれて学習を深める。 【充実コース】相乗型 パソコン以外の製品の国際分業の在り方を考える。 【発展コース】拡充型 日本の工業の将来の在り方はどうあるべきかを探る。 4 コースごとの学びを交流し、自分の考えの確かさと豊かさを評価する。	部品の調達や販売においても複数の国にまたがった国際分業がありそうだよ。その考え方を自分たちが会社をつくって探ろう。 パソコンの組み立てを各国の特徴や輸送を観点にして「国際分業」地図にグループでまとめよう。 「できる」活動  「国際分業」地図  価格を優先して ↔ 品質の高さ ↔ 価格と品質 基礎・基本の定着の層 (分かるⅠ) 観点の軽重を変えることで、多様な国際分業をとらえることができる。知恵を働かせるとこれからの工業に明るい展望がもてそうだ。 新たな問いへ <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> — 充 実 — パソコン以外の製品も、同じように考えることができるだろうか。 ・ 家電製品 ・ 自動車 ・ 繊維製品 </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> — 発 展 — 国際分業の発展で、やはり国内の生産が心配である。日本はどうあればよいのだろうか。 ・ 特殊技術の開発 ・ 職人技の継承 ・ 雇形態の生産立地移動 </td> </tr> </table> 基礎・基本の発展の層 (分かるⅡ) 国際分業は、いろいろな製品で多様に進展している。その中で、日本がしっかりと位置を占めるためには、モノづくりの技の継承が大切である。	— 充 実 — パソコン以外の製品も、同じように考えることができるだろうか。 ・ 家電製品 ・ 自動車 ・ 繊維製品	— 発 展 — 国際分業の発展で、やはり国内の生産が心配である。日本はどうあればよいのだろうか。 ・ 特殊技術の開発 ・ 職人技の継承 ・ 雇形態の生産立地移動	○ 前時の学習で部品にかかわる新たな国際分業があることを見通しとしてもらった。この見通しを自分たちが会社をつくるという体験的な学びによって深めることを確認し、意欲化を図る。 ○ コンピューターの各部品製作にあたっての難易度や、各国の賃金、技術力、日本からの距離など「国際分業」にあたって視点となりそうなことについてのデーターを各自のポートフォリオや資料コーナーから探る活動を設定する。その様子をもとに、本時の学習への意欲を評価する。関・意評：エンカウンター法を生かし、各自の考えをグループの国際分業地図にする活動では、二人の教師が同じ子供（事前に相談）の様子をみとり価値付ける。思 技 ○ 多様な国際分業を考えられたことを強調することで可能性の広がり注目できるようにし、日本の工業へ夢がもてるよう支援する。 実際の企業の考えも紹介し、現実性を高める。 評：共通に得た基礎・基本からより発展的に学べるようコース別学習を設定する。自己の課題意識を形成的に評価して学習を進める。自 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> ・ 概念を確固にするために多様な事例にあたり、転移力を培う。 </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> ・ 観点変更して日本の製造業の将来を構想することを支援する。 </td> </tr> </table> ○ コースごとの発表を組み合わせることで国際分業の広がり発展を整理する。知	・ 概念を確固にするために多様な事例にあたり、転移力を培う。	・ 観点変更して日本の製造業の将来を構想することを支援する。
— 充 実 — パソコン以外の製品も、同じように考えることができるだろうか。 ・ 家電製品 ・ 自動車 ・ 繊維製品	— 発 展 — 国際分業の発展で、やはり国内の生産が心配である。日本はどうあればよいのだろうか。 ・ 特殊技術の開発 ・ 職人技の継承 ・ 雇形態の生産立地移動					
・ 概念を確固にするために多様な事例にあたり、転移力を培う。	・ 観点変更して日本の製造業の将来を構想することを支援する。					

(5) 前時と本時(単元中 第3次2/3)における子どもの学ぶ姿

子どもの学ぶ姿	解 説
前時 	これまでに子どもたちは、自動車や電気製品を例にして、地域的な違いを生かして生産立地を選択していく「国際分業」についてまとめている。そして、ある子供の「一つの製品がどんな部品からできているか見てみると、いろいろな国で生産された部品で組み立てているものがある。」をきっかけにして、新たな学習の展開がなされた。 実際のところはどうか、使われなくなったコンピュータを分解して、それぞれの部品がどこでつくられているのか調べてみることにした。そして、本時の学習への問いを設定した。
本時(単元中 第3次2/3) 【できる・かかわる】 	部品の調達や販売において複数にまたがった国際分業がありそうだということ、その代表的な例としてコンピュータがあることを基盤にして、どこからどんな部品を調達しているか、自分たちが会社を作るという体験的な学びによって深める。 自分たちの分解したコンピュータの部品がどこから調達されたものを地図に位置づける。その「分業地図」を見ながら、分布や日本との距離などを確認していく。このようにいろいろな国から調達しているのには何かわけがあるのではないかと、経営者の立場になることで新たな問いへとつながっていく。
【新たな課題へ】 	「きっとそれぞれの部品が、この国から調達されているのにはわけがあり、このコンピュータの組み立てには意図があるはずだ」という見通しをもった問いを新たな課題として学習を展開していく。 これらの問いは、自分たちが実際にパソコンを分解してみて感じたこと、それらの生産地を世界地図に位置づけていくことによって次第に高められてきたものである。 すなわち、内発的動機づけにより意欲が喚起された姿である。「できる」活動を位置づけることによって、このような学びへの姿勢が形づくられていくのである。

【分かるⅠ（基礎・基本の定着）】



コンピュータの各部品製作にあたっての難易度や、各国の賃金、技術力、日本からの距離など「国際分業」にあたって視点となりそのようなことについてのデーターを各自のポートフォリオや資料コーナーから探る活動を設定する。

この段階では、集められた事項は羅列的でまだ構造化されていない。

左の写真は、ポートフォリオに整理したデーターからだけでは説明がつかないという自己評価をもとに、教師の用意した資料から調達の視点を探っている子どもたちのようである。

【思考操作】



評価カード

社会科 単元名「国際分業」 単元の主題に即して

学習目標	学習内容	評価項目
1. 日本の輸出・輸入品について調べる。日本の貿易・貿易の割合を調べる。（基礎知識）	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。
2. 日本の輸出・輸入品について調べる。日本の貿易・貿易の割合を調べる。（基礎知識）	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。
3. 日本の輸出・輸入品について調べる。日本の貿易・貿易の割合を調べる。（基礎知識）	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。
4. 日本の輸出・輸入品について調べる。日本の貿易・貿易の割合を調べる。（基礎知識）	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。
5. 日本の輸出・輸入品について調べる。日本の貿易・貿易の割合を調べる。（基礎知識）	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。	・日本の主要な輸出品・輸入品を調べる。 ・貿易の割合を調べる。 ・貿易の割合を調べる。

学習目標と評価項目は、学習内容と一致していることが確認された。

類別、関係、条件の思考・操作の類型により、羅列的な事項（ポートフォリオや資料コーナーで見つけたコンピュータ部品調達の視点）を概念化していく。

教師は、左にあるような評価カードに子どもの活動の様子を記録する。重点的に支援する子どもを数名決めて、育てるカウンセリングによってかわりをもつ。

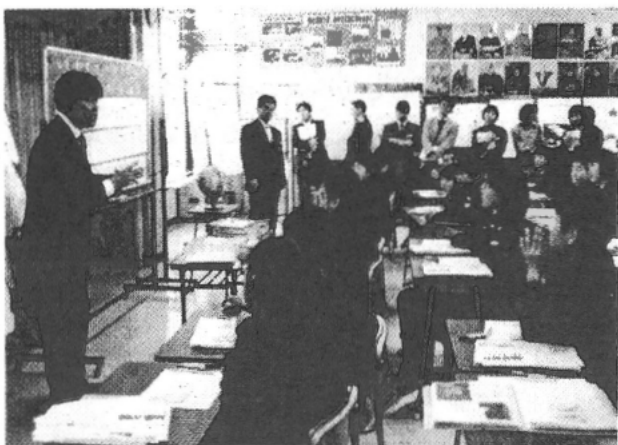
【分かるⅡ 基礎・基本の定着】



事項を吟味解釈し、自分なりに関係意味づけながら自分らしさを確認できる内容をつくり上げる。ただ、常に他者評価を取り入れ、独り善がりな考えになっていないか自己評価を行う。この場面は、自分の考えた調達の視点と、それらを総合して考えられることを文章化したものを交流しているところである。



【自分たちで評価規準をつくり、形成的な自己評価を行う】



自分なりに創り上げた概念を基盤に、新たな発展の方向を探る。

教師が「あなたは、次はこのコースで学習しなさい。」というのでは、子どもが自ら学ぶ道筋を見定めていく力の育成にはつながらない。また、子どもの自己評価に任せるといって、子ども自身が明確な規準をもたずに新たな発展の方向を探るのでも、確実な定着にならない。

確かに豊かな自己確立に寄与する発展学習の展開を目指し、代表的な子どもの表現を取り上げ、それらについてどう「よさ」や「不十分さ」を指摘できるかを全体交流する。また、前活動である「グループ交流」でどのような話し合いがなされたかを発表する。

こうして典型的な表現をもとに話し合うことで、本時の課題に対する評価規準を自分たちでつくっていく。これは同時に、自分はどのタイプと位置づけられるか、他者評価を取り入れて形成的な自己評価を行う場でもある。

【基礎・基本の発展 発展学習】

前学習活動において自分たちでつくった評価規準にもとづいて、自分の新たな学習の道筋を選んでいく。本時の学習が自分のものとして位置付いているかどうか他の事例で確かめようとする「深まり」を目指した学びと、今日の学習をさらに超えて今後の日本の工業というように目を「広げる」展開に分かれていく。

前述したように、自分たちでつくった規準に従い形成的な自己評価によってコース選択が行われることを基本とするが、教師の評価によってコース変更を示唆する場合もある。

概念を確固にするために多様な事例にあたり、転移力を培う。



家電製品、自動車、繊維製品の国際分業の在り方を本時の学びを当てはめながら調べる。

観点変更して日本の製造業の将来を構想することを支援する。



職人技の継承や特殊技術の大切さについて多様なメディアを使って調べる。

Ⅲ 研究実践のための「教師の専門性を高める活動」

平成14年度からの学校完全週5日制の実施にともない、県下すべての子どもたちに「確かで豊かな学力」を保障するために、「教師としての専門性を高めていくこと」が強く求められている。

香社研においては、その時期に求められる課題に対応した研修の場を設定し、研究を継続的に発展させている。今回の学習指導要領への対応に向けた取り組みとしては、平成9年度から「未来に生きる人間づくり」という研究主題を設定し、県下どの学校もが主体的に特色ある学校づくりを推進できるようにするための、その拠りどころとしての基底となる単元（基底単元）の構想と実践を本研究会の主たる研修内容としてきた。

ここでは、その研修活動の経緯を整理し、本年度からの研修の方向性を見定めたい。

【研修の歩み】

平成9年度・平成10年度

平成10年度の全国大会に向けて、社会科基底単元作成委員会による「新学習指導要領準拠 社会科基底単元の構想 ―内容の厳選と課題単元による展開―」の執筆を通じた研修活動を行った。その成果を「新教育課程の構想と実践 総合学習・新社会科学学習の展開」にまとめ出版する。

平成11年度・平成12年度

「社会科基底単元の構想」を県下どの学校もが活用できるようにするために、「理論の平易化と実践の日常化」を目指し、県下各学校から集まった「社会科基底単元実践推進委員会」による研修活動を行った。その成果として「社会科基底単元実践事例集 VOL. 1」を刊行する。

平成13年度

新学習指導要領実施に向けて、社会科基底単元によるさらなる発展を求めて、県下各学校から研究実践の核となる教師による研修活動の成果として「社会科・総合的学習 基礎・基本の定着と発展の学習～指導と評価の統一による～」を出版する。

平成14年度も、これまでの研修を継続・発展させ、土曜休業日等を利用して「県下の教育に寄与しつつ『教師の専門性を高める活動』」をぜひ展開していきたい。

では、この平成14年度からの研修内容および研修活動として、視点となることを挙げておく。

◆ 「確かで豊かな学力」を形成するために「社会科基底単元」を改訂する。

「社会科基底単元」を作成し実践を進めてきたことを踏まえ、各校の指導計画と評価規準を作成する。

「真の学力を人間・能力・知識からみる」ことにより、社会科の系統性・順序性・発展の方向性を明らかにし、一人一人の子どもの学びの状況（定着・発展）に合った教材開発及び、基礎・基本の「定着」と「発展」の学習を取り入れた指導計画を作成する。

◆ 人間観を育てる教育方法を研修し、指導カードを作成する。

人間形成の学習論に立つ授業過程の開発として、自己実現を求める自分を創るために形成過程における自己評価の重視とともに、教師の援助活動の在り方を集団の中で個を育てるという視点から見直す。

○ ポートフォリオによる学習のすすめと自己評価カードを作成する。

授業過程に即した形成的自己評価活動を展開できるようにするための「ポートフォリオ」「自己評価カード」の研究実践を行う。

○ エンカウンターと育てるカウンセリング（援助）による集団の中での個と個別化・個性化の両面から探究するプログラムを作成する。

授業の中での主体的な活動を通じた相互交流として「それぞれの考え方・感じ方を分かり合い支え合う交流」を展開できるようにするための教師の援助の在り方を探究する。

○ 少人数の授業の教師のかかわりをプログラム化する。

従来のような固定的で画一的な学習集団を見直し、より柔軟で弾力的な学習集団をつくり、その子に合った指導法を研究・開発する。

次に、これらの研修活動の基盤になる理論を解説しよう。

1 真の学力構造から社会科の基礎・基本を考える

(1) 真の学力構造を人間・能力・知識からみる

教育の新たな枠組みを構築し、今後を見通した実践の姿を追求していく上での前提となる「学力の構造」について、これまで次のようにとらえてきた。以下は、「真の学力を人間・能力・知識からみる」と項目を付け、学力構造について提案してきた内容である。

前回の教育課程の改訂で、新しい学力観として、「知識の量的な習得への偏りを修正して、子どもの成長・発達や将来の生活に生きて働く能力（学ぶ意欲・思考力・表現力・判断力）や資質（創造性・豊かな個性）の育成を重視する」という内容が提唱され、その実践が進められてきた。一人一人の学ぶ意欲を大切にしながら、思考力・判断力・表現力などの能力育成を重視してきたのである。社会の変化に主体的に対応できる能力を育成することは、21世紀を生きる子どもにとって必須条件である。

その一方で社会の構成員であり、自らの努力で公的資質を高めなければならないという面もある。そこで、「真の学力」として、思考力・判断力などの能力育成にとどまらずにそれらの能力を生かして、人間としての生き方・在り方を考える力を求めたい。総合的に生きて働く力としてとらえるのである。単に社会事象を知る、人々の営みが分かるだけでなく、それらのよさが分かり、自分を理解し、社会の構成員としての誇りをもつ。課題に対しては、自ら社会に働きかけられるような姿を重視する。

「真の学力」では、これにさらに知識を加える。知識については、量的な習得への偏りを改めなければならないとしても、知識を軽視してはならない。知識と能力とのかかわりは、能力を育てる知識と、新しい知識を得る能力の二つがある。思考力・表現力などの能力は、子どもの発達を促す内容をもつ知識を媒介として育てられ、新しい知識を獲得していく。そして、その知識が生きて働くものとして、より高次の思考力・表現力などを育てる。

以上、述べてきたことを踏まえ、真の学力の構造を「生きる力」の育成から右図のようにとらえる。

真の学力育成の中核を、人間とする。人間としての生き方・在り方、もっといえば、「自他ともに生き、互いに人間としてのよさを出し合い、認め、高め合う」ことを中核とする。そして、それを支えるものに、能力と知識を考えるのである。



この学力構造をもとに、社会科の基礎・基本もとらえたい。「時間的にも、精神的にもゆとりのある教育活動を展開する中で、じっくり学習する」と示されているが、時間数は、削減されているのが現実である。その中で、何を基礎・基本ととらえるかの視点は、真の学力構造から導かれる「人間としての生き方・在り方」が中核であり、それを支える「学ぶ意欲に支えられた能力」と「生きて働く知識」であろう。何を「基礎・基本」とするかの論議と実践の追求にあたっては、この構造を踏まえながらを前提としたい。

これらは、社会科の本質である「社会認識を深め、国際社会に生きる民主的・平和的な国家・社会の形成者としての公的資質を育成する」とことと結びついた「社会認識の内容としての知識・理解」、「社会認識を深める諸能力」、「公民としての社会的態度・能力」と軌を一にするものと考えている。

(2) 学力構造の中核となる人間を「自己実現」と「人間観」からとらえる

今の子どもたちを取りまく諸問題を念頭に置いたとき、真の人間づくりをどう図るかという課題に「正面から取り組んだ学習論」とそこに立つ授業過程の開発が急務である。そのような趣旨から学力の中核「人間」の鍵となる要件として、「自己実現」と「人間観」を挙げておきたい。

【自己実現】 自分自身に対して働きかけ、それまでになかった何かを、自分自身の上に実現していくことである。そうした何かの実現は、価値的で、人間としての成長・発達として考えられるものである。1時間の授業の最初と最後で、どういう自分について深く認識できるようになったかを見つめていきたい。

【人間観の形成】 人を観る一般的な枠組みのことを指す。人の行為を単一の可能性で見たり、決めつけたりするのではなく、どこまで多くの可能性で観ることができるかと言いかえることもできる。このような「生きる力」としての「人間を見つめる力」を学力の中核としてとらえたい。

(3) 基礎・基本のとらえ方の基調を考える

教育内容を「基礎的・基本的なものに精選する」は、教育課程の改訂のたびに繰り返し強調されてきたことである。今回が3度目になる。精選を「厳選」と言い換えても、その基調がかわらなければ従来の踏襲にすぎず、お題目に終わってしまうことにもつながる。そういった点から、基礎・基本のとらえ方の基調を考えるということで、以下の4点を挙げ、今後の研究・実践の手がかりを示したい。

① 教材・学習材をめぐる

従来、「基礎・基本」の徹底や定着を目指した学習の実践があいまいになってきたのには、各教科において学習の目標とされている「児童が習得すべき教科の基本的な概念や、それらを使用する能力・技能などの『教科内容』」と、これらの学習のために利用される「教材・学習材」との区別がつけられず、混同されていることがあるのではないだろうか。教科内容を減らすことと、教材・学習材を少なくすることが同じと考えられてしまっている傾向がある。

教科内容の厳選と教材とは別の次元の問題である。教材をむやみに削減し、学習材を限定してしまうことは、内容を子どもにとってかえって難しいものにしたり、つまらない無味乾燥なものにしてしまうおそれがある。その定着や見方・考え方の転移を浅いものにしてしまうことも考えられる。

教科内容を厳選することが、一つ一つの内容について学習する時間を十分に確保することにつながるとともに、多様な興味ある教材・学習材を使って分かりやすく内容を説明したり、深い多面的な追求をしたりすることを可能にすると考えたい。

② 基礎・基本の習得をめぐる

基礎・基本は、「繰り返し学習する」ことによって習得されるという考え方に対し、その基調から転換を図りたい。半ば無意識的・自動的に遂行される技能の習得には、「繰り返し学習する」ことが必要ではあるが、より高次の知識の習得には、別の方法が必要である。

基礎・基本の学習と「自ら学び自ら考える」体験的で、課題解決的な学習とが、何か別物のようにとらえられている部分がないだろうか。「表現と操作」に基づく「自らの力で論理的に考え判断する」、「自ら調べ、まとめ、発表する」といった活動は、「基礎・基本」の学習においても必要なことで、これこそが基礎・基本の確実な定着を図る方策だと考えたいのである。

③ 基礎・基本の定着をめぐる

基礎・基本は、子ども一人一人のその後の学習や生活に生きて働く力となったとき、初めて意味をもつ。このように考えたとき、基礎・基本の定着をめぐるには、相対性や多面性、弾力性という点から授業展開を考えることが必要になる。

相対性 基礎・基本とは、何かを支えるものとして意識される必要がある。本時の学習の成立を可能にしていることは、既習のどのようなことであるかが明らかにされて初めて、基礎・基本として働いたことを実感できることとなる。また、そのような体験を重ねることによって、新たに学習したことが次なる学習のどのようなところで、どのように生きて働くのかをつねに意識しながら学習に臨むことができるようになる。

多面性 基礎・基本とは、知識・理解や技能・表現といった狭い部分に限定されるのではなく、思考・判断、関心・意欲・態度を含め、多様な資質や能力ととらえることが大切である。これについては前項で述べたとおりである。何かを「知っている」「分かる」ということも重要である。それとともに、自分で工夫しながら学習活動を発展させたり、自分の持っているよさをフルに使いながら学習を展開するなどという幅広い資質・能力面を授業展開のポイントとしたい。

弾力性 基礎・基本は、言うまでもなく一人一人の子どもに確実に身に付けられ、生きて働くものとなって初めて意味をもつ。ところがこれまで、ともすると一定概念の習得として学習集団のまとめがあり、ここには個の基礎・基本という部分が見えにくいという実態があった。個の基礎・基本の成立の上に、初めて集団における一定の概念の習得があることへの転換が求められる。

2 学習内容の厳選による、教材の再構成とカリキュラムの構想 ～基底単元の構想～

(1) 「ゆとり」と「学習内容の厳選」

中教審・教課審の答申の中で、学習内容の厳選の必要性が強調された。自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」の育成を基調とする教育を進めるためには、「ゆとり」のある教育課程を編成することが不可欠であり、どうしても学習内容の厳選を図る必要があるとされた。その具体化の姿としての新指導要領では、単なる知識の伝達や暗記に陥りがちな内容、各学校間学年間・教科間で重複する内容、学校外での活動や将来の社会生活で身に付けることが適当な内容などを削減したり、取り扱いを軽減したりされている。その上で、さらに「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の中で、地域の実態や児童の興味・関心などに応じて、厳選して取り上げるようにすることが強調されている。

この学習内容の厳選は、「不易と流行」を踏まえ、学校で身に付けるべき基礎・基本は何かなどを問いつつ徹底して行うべきであり、特色ある学校づくりを進める地域・学校プランに基づくカリキュラムを編成する上で、新指導要領実施後も、社会科教育の改善にあたって大切な理念となるものである。

(2) 厳選と新社会科の構想

厳選は「ゆとり」を生み出すもとになることから、当然学習内容を削っていく必要がある。と同時にこれまで積み上げてきた総合学習、社会科学学習の成果を基盤に、真に子どもの課題意識と学習内容の高まりを生み出す社会科学学習の基礎・基本に立つ教材を「厳しい目で選び、新たに創り上げていく」過程でもある。学力の構造を踏まえ、「生きる力」を育成する、さらに社会科の基礎・基本からカリキュラムを創っていく立場から、厳選をどのような点から考えてきたか、また、そのことと新社会科の構想とのかかわりについてはどうか、根本としたものをいくつか挙げておきたい。

ア 総合学習とのかかわり

学校課題の解決を図り、学校教育の柱となる総合学習の実践の中にどのように社会科学学習が組み入れられているか。組み入れられていない社会科学学習にどう軽重をかけつつ、子どもの課題意識を大切にしたい展開を考えるか。

イ 教材開発の視点の明確化（別項で詳述する）

「不易」と「流行」を見つめ、社会の変化を見通した学習内容とするには、どのような視点から基礎・基本の内容をとらえ教材開発していけばよいか。また、学年の発達に応じて、視点の関連をどう図るか。

ウ 子どもの認識の系列についての再考

「易から難」、「単純から複雑」、「近から遠」、「旧から新」など、従来の教材配列のもととなる考え方が、常に子どもたちの学びにとってふさわしいものかについて再考する。
農業単元や工業単元といった領域にこだわった単元の在り方も見直す。

エ 小・中、学校外における関連

歴史学習においては、通史を二度行わないという表現が中教審答申などで挙げられている。小学校らしい歴史学習をどう展開するかは、厳選にあたっての大きな課題である。また、完全学校週5日制に向けて、学校外の学習との関連も視野に入れる。

(3) 厳選と新社会科の構想にあたっての基本的な考え方

① 学習内容の選択から社会科の基礎・基本を考える

ア 社会の変化を見通した教材開発の視点の明確化

これからの社会を展望したときに、我が国の社会は様々な面での急速な変化が予期される。それらの変化に対応する教育の在り方が当然模索されるべきである。

反面、教育においては、どんなに社会が変化しようとも「時代を超えて変わらないもの」を大切にしておくてはならない。社会の進展の中で「不易」と「流行」を十分に見つめつつ、教材として具現化していくことで、これから生きる子どもたちの生き方や在り方となって身に付いていくであろう。「国際化、情報化、科学技術の進展等の変化」に対応すること、また、「我が国の歴史や伝統への愛情や、豊かな人間性を希求し、人権を尊重する心」を培うということなど、今の教育、また社会科に託された役割から教材開発にあたっては次の五つの視点を大切にしていきたい。

国際化	国際化社会が進展し、世界の中の日本人としての生き方が求められている。広い視野をもち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化をもつ人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ることが必要である。
情報化	様々な情報が氾濫し、マルチメディア時代となる将来、情報を主体的に処理する力が求められている。情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人的な能力、並びに人間関係の希薄化など情報化の陰の部分も勘案できる資質等の育成が求められる。
環境	環境問題については、国内の環境にとどまらず、地球環境の危機としてとらえなければならない状況となっている。学校教育では、かけがえのない国土や地球の環境に目を向け、人間と自然が共存していく地球としていくために具体的な行動をとる子どもの育成が望まれている。
人間化	子どもたちが将来自己実現を図りながら、変化の激しい社会で生きていく上での基準となる生き方の形成が求められる。豊かな人間性、人権意識、正義感や公正さを重んじる心、自己を律しつつ他者と協調するなどの心を尊いと感じることのできるような人間として育てていくことが重視されている。
文化	我が国が形成されてきた歴史、先達が残してくれた芸術、文学、民話、伝承などを学び、これらを大切にしていこうとする心を養うこと。それを現代に生かし、新たな文化の創造者・発信者として生きていこうとする資質の育成が求められる。

イ 人間観を育てていく教材の開発

社会科で目標とされる「内容についての知識（内容知）」や「方法についての知識（方法知）」をもとにして、「人間についての知識」の重視が求められている。社会の変化を見通す教材の視点とともに、生き方や在り方自体がそこに物語られている教材の開発を目指したい。

歴史学習を例にとってみる。いくつかの事象をつないで、時代の特徴やイメージについて、自分なりの考えを創り上げていく。その学習の中に、「その時代を生きた人にも、様々な悩みがありそれを乗り越える工夫や喜びがあったはずである」と、そのような人間の心の入ったドラマが描かれていけば、そこから子どもたちは一人の人間の生き方や在り方を考えていけるはずである。時代をたくましく生きる姿に感動し、自らが生きる血や肉にすることができよう。

学習方法の中で、自分で自分を育てよう、たくさんの友達の中で育てようという姿勢で学習方法を見直すとともに、もっと積極的に人間としての生き方を、感動とともに考えられる教材の開発を視野に入れたい。このことが、学力構造の核であり、社会科の基礎・基本とする人間としての生き方・在り方を、子どもたちに見いださせることにつながると考える。

ウ 基本課題と具体課題

現代の教育課題、また社会科に託された役割から、人間観を育てていくことを含めて教材開発の五つの視点「国際化」「情報化」「環境」「人間化」「文化」を大切にする。これまで社会科の教材を構成する上で軸となってきたものも入れて、社会科の学習内容の選択・厳選による教材の再構成においては、次の四つを「基本課題」として設定したい。「世界の中の日本人」「地球環境にやさしく」「くらしをひらく生産と消費」「地方からの文化発信」である。

この基本課題の求める姿が明確になるように、より分化した課題、「具体課題」も下のように設定する。

「世界の中の日本人」	— 「国際関係と平和の確立」
「地球環境にやさしく」	— 「生命・財産・資源の保護・保全」
	— 「環境の保護・保全」
「くらしをひらく生産と消費」	— 「生活圏の広がり和他地域とのかかわり」
	— 「生産・流通・消費のしくみの変化」
	— 「地域環境と人々の生活」
「地方からの文化発信」	— 「人権の確立と民主政治」
	— 「社会の発展と人間の歩み」

② 子どもが自ら学ぶという点から社会科の基礎・基本を考える

ア 子どもの課題意識の重視

子どもの課題意識は、必ずしも領域の枠のなかに収まるものではない。生きて働くという視点で考える時、課題解決のためには、ますます多様な領域の内容や方法が必要となってくる。領域という枠組みをはずした学習の場が設けられていることが、子どもの学習意欲を高め、知識構造の変容につながる。

今回、教課審の審議のまとめの中で改善の具体的事項として「生産活動と消費生活に関する内容を集約統合」、「・・・運輸の働きについての内容は、農業や工業などの内容に関連」などが求められ、新指導要領でその具体的な姿が示されているのは、枠組みをはずして、子どもの課題意識を重視しようということと対応していると考えたい。子どもたちの課題意識の連続と深まりの上に立ち、思考力と表現力をつけていくためには、領域の枠を越え、学習内容を開く力を発揮できる授業を構想・実践する必要があると考える。それは一つの単元において、じっくりと「ゆとり」をもって課題に取り組むことができ、自らの確かな知識構造の変容を認めていける学習の場でもある。

イ 領域単元から課題単元へ

現在、子どもの学習内容は、教科書どおりの枠組み・構成になりがちな領域単元になっている。この領域単元から課題単元へ移行することを大切にしたい。課題単元とは、単元間の枠、場合によっては学年間の枠を取り払い、一つの課題に向かって子どもの意識が連続しつつ、「基本課題・具体課題」の解決を図るよう構成しようとしたものである。

この課題単元によって、従来の教科書単元が限定してしまう領域的で系統的な内容を子どもの課題や地域・学校の実情・課題に応じた単元構成、さらにはカリキュラムに組み替えることが可能となる。

③ 厳選による教材の再構成 年間計画を含めたカリキュラムづくりという点から

子どもたちが調べたい、学びたいと感じる内容と学び方を大切にするには、時間のゆとりが必要である。しかし、教材のすべてに同様のゆとりをもたせていくことには、難しい部分がある。どうしても、子どもの立場に立った「ゆとりをもたらず」厳選による教材の再構成・年間計画づくりが必要となる。この社会科のカリキュラムづくりにあたっては、教科書を中心として基礎的基本的な事項や能力を徹底して学習する単元と、それを基にして深めていく部分に区別した単元配列や、教材によっては選択して学習するなど軽重をつけていくことが必要である。教材提示をしてきちんと学べる教材単元、自ら学ぶ学習である課題単元のバランスを大切にしたい年間計画をつくっていく。この教材単元、課題単元については、次項でさらに説明することにする。

(4) 厳選を図るための具体的方策 — 社会科「課題単元」、「教材単元」の実践 —

① 子どもの課題意識と基本課題・具体課題との接点を求める「課題単元」

身近な事例に直にあたり、自ら学び、考えることのできる「創る学習」の展開が今求められている。従来の領域にこだわった教材の構成（領域単元）から、子どもの課題意識に基づいた構成（課題単元）へと転換する。これまで本項で述べてきた厳選の基本的な考え方に立って、カリキュラムづくりの柱をどう置くかの方策については、次のページの図にあるようにまとめているとおりである。

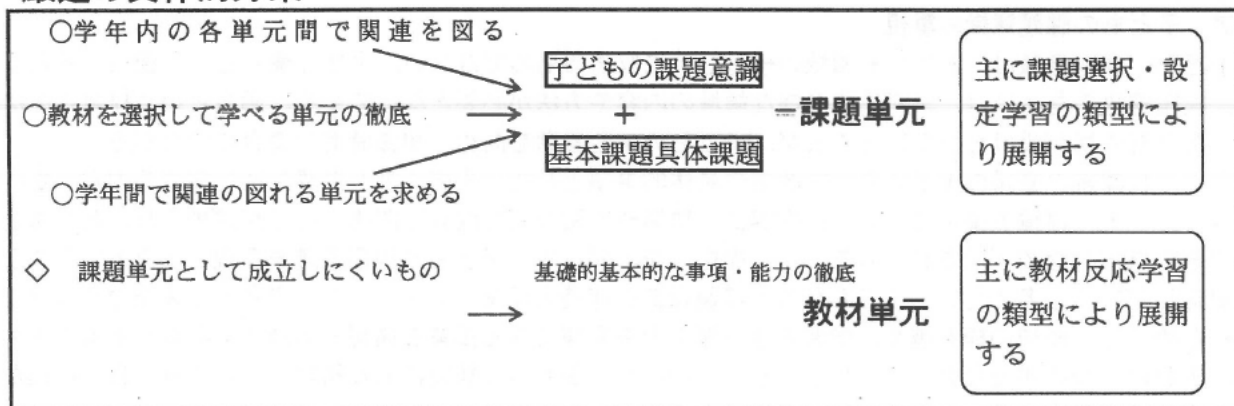
この課題単元づくりにあたっては、「子どもの課題」と、「現代の教育課題などを踏まえた教材開発にあたっての課題」との接点を重んじる。そのことからの内容の再構成を考えると、学年間の関連や選択と同時に、学年を越えて継続的に追究される課題単元も構想されていく。3年生からの課題が4年生に引き継がれるという構想や、3年生から6年生、それぞれにその課題について発展的に学んでいくことも視野に入れて研究を進めていきたい。

② 基礎的基本的事項や能力をはぐくむ「教材単元」

課題単元での子どもの豊かな「創る学習」を支えるものが「学び」を重視した教材単元の展開である。この単元では、基礎的基本的な事項や能力の育成を徹底して行う。地図や資料の正確で有効な読み取り、事項や用語の把握などを図り、きちんと分かることをねらいとする。教師は、子どもの教材への反応を見極め、「個別化」のための支援・援助を行うことを主な役割とする。

以上示した「課題単元」と「教材単元」の組み合わせにより、新社会科を構想し、「社会科の基礎・基本を見つめた特色あるカリキュラムの編成」という研究実践を進めたい。

厳選の具体的方策



(5) 厳選による教材の再構成 「社会科基底單元」の構想

以上、(1)～(4)で述べてきたことをもとに、厳選による教材の再構成をプランとしてどうしているかについて示したい。本研究会では、社会科学習の特色あるカリキュラムを編成するにあたり、香川県下のどの学校もが、社会科単元の基底としていただきたいとの願いから「社会科基底單元」を設定している。これは、本会がこれまで研究実践を進めてきた「内容の厳選」と「課題單元構想」を軸に構成しており、香川県の歴史や風土なども考慮に置いて新学習指導要領に準拠しようとしたものである。

本年度までもこれを基底に、各地域・学校の課題に応じ、「生きる力の育成」を理念とした、確かな社会科学習を展開するべく、実践を深め広げてきている。平成10年度には、これまでの実践も含めて、「新学習指導要領準拠 社会科基底單元の構想 一内容の厳選と課題單元による展開一」を冊子にまとめた。また、平成12年度には、社会科基底單元実践推進委員会の編集による事例集が発刊された。具体的な実践の姿については、これらを参照していただきたい。

前者の冊子の概要について、以下のように説明をしておく。なお、本提案では、社会科基底單元【單元名一覧】以外は、紙面の都合上その一部分だけを載せておくことにする。

社会科基底單元 一課題單元と教材單元による一 【單元名一覧】 学習内容の厳選による、教材の再構成とカリキュラムの構想にあたって、本県として基底となる單元名の一覧である。これまでの実践の成果や下に挙げた「教材の再構成」などの手順を踏まえつつ、「教課審の審議のまとめ」、「新学習指導要領の目標と内容」を考慮して作成したものである。
基本課題・具体課題からみた社会認識の内容と系統 新学習指導要領に示されている社会認識の内容を、基本課題・具体課題からみたときにどのような構成になっているのかを整理したものである。この課題をもとに、学年内・学年間で関連を図る内容を考慮し、課題單元の構想をしていく。総合学習を実践するにあたって、社会科の内容を統合しようとするときの参考ともなる。自校の総合学習がどのような教育課題の解決を目指しているかに応じて、そこに組み入れる社会科の内容をどうとらえればよいかが分かるよう工夫している。
基本課題からみた 厳選による教材の再構成 基本課題・具体課題とのかかわりの上で3～6年生の教材配列、單元づくりをどうするかを表したものである。社会の変化を見通した教材開発の視点と、これまで社会科の教材を構成する上で軸となってきたものをもとにした、基本課題・具体課題から、教材をどうみかを一覧できるよう表にしているところに特徴がある。
社会科單元基底案 課題單元・教材單元の概要 單元名一覧に示されたそれぞれについて、その概要を記している。大枠を示すことで、各地域、学校で創意工夫して実践できるようにしている。すでに述べた基本課題・具体課題からみた目標を示しているところに特徴がある。

社会科基底単元－課題単元と教材単元による－【単元名一覧】

3年生

- I 課題単元 「まちをたんけんして、人びとのくらしをさぐろう」
 - ・市町の地形、土地利用、交通、公共施設を絵地図にする
 - ・他地域の友達と絵地図を交換する
 - ・いろいろなまちのくらしがあることを探る
- II 地域選択 「まちのくらしをつくるしごとと、売るしごとからしらべてくらべよう」
 - ・わたしたちのくらしとものをつくるしごとをしらべよう
課題単元として実践する学校と教材単元として実践する学校との交流によって展開
 - ・わたしたちのくらしと売るしごとをしらべよう
課題単元として実践する学校と教材単元として実践する学校との交流によって展開
- III 課題単元 「まちのようすやくらしがかわったことを絵地図にしよう」
 - ・くらしのようすや地域のようすが変わったこと
 - ・昔から変わらないもので、残されているもの
 - ・くらしをよくするよう変えた人物、守ってきた人物

4年生

- I 課題単元 「わたしたちのくらしを守るしごとのようすを絵図にして調べよう」
 - ・くらしの安全を守るしごと（交通事故・火災）
 - ・環境を守るしごと（廃棄物・下水）
- II 課題単元 「わたしたちのくらしを高めた人たちのはたらきをしらべて流れ図にしよう」
 - ・くらしを高めるしごと（上水道）
 - ・水を求めてきた先人の努力
- III 課題単元・教材単元
「県のようなすを調べ、他の土地とくらべて、よさをイラストマップにまとめよう」
 - ・県の特徴ある地域の調べ（含 伝統的な技術を生かした生産）
 - ・他地域の特徴あるまちづくりからみた県の特徴
 - ・地図の見方・読み方、資料の見方・読み方（教材単元として展開）

5年生

- I 課題単元 「スーパーマーケットから農業生産のようすを調べよう」
 - ・教材単元「わたしたちの国土の地図を開いて、人々のくらしを調べよう」を単元の中に組み入れて実践（環境、地形、生産と交通【人口】、土地利用）
- II 課題単元 「商店街の品物から工業製品の生産のようすを調べよう」
 - ・教材単元「わたしたちの国土の地図を開いて、人々のくらしを調べよう」を単元の中に組み入れて実践（環境、地形、生産と交通【人口】、土地利用）
- III 課題単元 「香川の産業を支えている職人技を調べ、新聞にして情報発信しよう」

6年生

- I 課題単元 「地方史から出発して、日本の歴史を調べ、年表にしよう」
 - ・地域に残る文化財や先人とのつながりのある歴史上の人物や文化遺産と結んで、歴史に対する興味をふくらまそう
 - ・我が国の歴史に残る先人や文化財から選んで、自分の生き方とつないで考え、友達と交流して年表にしよう（教材単元として展開）
- II 教材単元→課題単元
「瀬戸大橋（例）ができるまでと、できてからを調べ、政治とのかかわりの新聞にし、討論しよう」
- III 教材単元→課題単元
「世界の中の日本人としての生き方を論文にしよう」
 - ・日本と深く結びつく国々と人々のくらしの情報を集めよう
 - ・情報を整理して、地球環境と世界平和についての論説文を書こう

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

基本課題・具体課題から見た社会認識の内容と系統

基本課題	地球環境にやさしく	具体課題	環境の保護・保全
------	-----------	------	----------

(社会認識の内容)

学年	地理的内容	歴史的内容	公民的内容
3年	○地域の人々の生活は、自然環境と深い関係がある。	○自分たちの市や町を中心とした地域の自然や社会環境の移り変わりや生活の変化	○地域の人々は、協力して生活の向上や住みよい環境づくりに努力している。
4年	○飲料水等の確保の対策や事業は地域の健康な生活の維持と向上に役立っている。森林やダムはその点で重要である。	○廃棄物の量や質が変化してきている。また、処理の方法も変わってきている。	○廃棄物の処理についての対策や事業は、地域の健康な生活の維持と向上に役立っている
5年	○国土の保全や水資源の涵養などのために森林資源が大切である。その育成や保護が大切である。	○公害の防止にあたって、工場・国・地方公共団体が対策を進めてきた。	○生活環境を快適にし、国民の健康を保護するため、公害の防止がきわめて大切である。
6年	○環境破壊は自国のみにとどまらず、国境を越えて進行しており、各国で環境の保護に努めることが肝要である。	○地域の人々の生活の向上と安定のために、先人が地域の開発を行ってきた。その努力は、今も引き継がれている。	(具体事例：大気汚染、水質の汚濁)
		○地球温暖化防止などについては各国政府・国際団体が会議を開き、計画を立てて、地球規模で対策を進めてきている。	○環境の保護保全のために国際連合は大きな役割を果たしている。我が国も国際社会の平和と進展のために、果たさなければならない重い責任と義務がある。

(教育課題からみた解説)

具体課題「環境の保護・保全」を通して解決を図る教育課題は「環境」である。本具体課題は、主に自然環境を対象とする。環境の問題は国内にとどまらず、地球環境の危機としてとらえなければならない現状となっている。学校教育では、かけがえのない国土や地球の環境に目を向け、人間と自然が共存していくために具体的な行動をとる子どもの育成が望まれる。

それぞれの地域の自然条件や様子を調べることににより、子どもたちは自然の美しさや大切さに気づくであろう。また、日本の国土そして地球全体の自然の様子やそれに合わせた人間の営みを知ることにより、自然破壊の恐ろしさと、環境の保護・保全の大切さについて学んでいくと考える。

さらに環境との調和を求めて、自然と共に生きようとしてきた、先人の長い間の工夫や努力のあとを探り、自分たちの生活の背景や今後のあり方を地球規模で考えることをここでは目指している。

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

社会科単元基底案 課題単元・教材単元の概要

課題単元

4年 わたしたちのくらしを高めた人たちのはたらきを調べて流れ図にしよう

主張点

私たちの郷土は、先人の水を求め、大切に活用し開発してきた業績に支えられ現在に至っている。水を求めた開発の歴史と人物の働きを地域の移り変わりの中に位置づけ調べていく。今の豊かで住みよいくらしを支える水を生み出す過程と地域の願いを一体として扱うことが、今の自分のくらしと水のかかわりを見つめ直すことにつながる。水不足を克服する地域の課題の明確化、水源確保に協力してくれる他地域への感謝など、自分の地域の水道の仕組みの理解を超える、香川ならではの地域性を生かした課題単元の構想である。

教育課題から見た社会認識

- 香川県は雨が少なく、水を安定して得たいという願いの実現のために昔から多くの人々が知恵をはたらかせ、努力してきた
- 香川用水の開通や、大型ダムの建設などによって水事情が好転してきた結果、人々の水に対する意識が薄らいでおり、給水量が増えても使用量は増加の一途をたどり、新たな水源を確保しなければならないという悪循環を生んでいる
- 我々も限られた少ない水を有効に使ってきた先人に学び、現在の時代にあった水の有効利用の方法について考えていく必要がある。

単元の概要

学 習 方 法	学 習 内 容
1 地域を歩き、水に関係する事物を調べる。	○地域には、ため池や用水路、新田、香川用水など人がつくった水に関係するものがたくさんある。
2 調べた事物の移り変わりを年表に表現する。	○香川県は雨が少なく昔から水不足で苦しんできた。
地域の水を求めてきた歴史を流れ図を入れた絵年表にまとめよう	○昔の人々は、地形や水の特性を生かして、用水路をつくってきた。水を無駄なく有効に分配するために、水を共同で管理してきた。
3 地域の代表的な水に関する開発と、人の働きを調べ、絵図や模型などにまとめる。	○水を確保するために、西嶋八兵衛（例）によってため池の築造や改修が行われた。
4 今の豊かな水が生み出されるまでを調べ、流れ図にまとめる。	○水を安定供給するために香川用水がつくられた。用水の運用にあたっては広く他地域の協力を得ている。
5 豊かな水を維持するための、他地域の森林を育てる活動を知り今のくらしをふりかえる。	○水がわたしたちの家に届くまでには、多くの人々の工夫や努力がある。上水道はわたしたちの健康な生活にとってなくてはならないものである。
6 水利用に対する自分の考えを絵年表の「これから」の部分に付け加え、絵年表を完成させる。	○水を安定的に得るため、上流部では森林を守る活動が行われている。
	○水道が普及してから生活様式が変化し、多くの水を使うようになってきた。
	○一人一人が、水が有限で貴重な資源であると理解する必要がある。先人の知恵、他地域、外国の取り組みに学び、水を有効に利用する方法を考えていかなければならない。

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

基本課題からみた 厳選による教材の再構成 (表中 課…課題単元 教…教材単元)

		5 年		
基本課題	具体課題	教材の再構成による厳選プラン	新指導要領からみて	解 説
世界の中の日本人	国際関係と平和の確立			◆について ○ この単元は、教科書の教材配列では、第4学年の「各地の暮らしとわたしたちの国土」にある内容を基盤としている。 ・基本図や資料をもとに、環境、地形、人口分布、生産の全国的な傾向や問題点をつかむことをねらいとする。この単元で出てくる視点を教材単元としてⅠ、Ⅱの中に組み込んで実践する。 Ⅰ・Ⅱについて ○ 農業・工業にとどまらず、運輸通信との関連を図った再構成とする。流通や情報の働きに目を向けつつ、領域を越えた課題単元にする。 Ⅲについて ○ Ⅰ、Ⅱで学習した産業を支える人々の職人技に焦点をあて情報発信する。情報の正しい収集や活用の仕方、伝達の方法を身に付けることの大切さを、実践を通して気づく場とする。その過程に新聞社の情報と国民生活とのかかわりや影響について学ぶ場を位置づける。
地球環境にやさしく	生命財産の保護・保全			
	環境の保護・保全	◆私たちの国土の地図を開いて、人々の暮らしを調べよう ・環境 ・地形と気候 ・生産と交通 ・土地利用 ・気候条件からみて特色ある地域の人々の生活	教	
くらしをひらく生産と消費	生活圏の広がり与其他地域とのかかわり			
	生産・流通・消費のしくみと情報	Ⅰ スーパーマーケットから農業生産のようすを調べよう Ⅱ 商店街の品物から工業製品の生産のようすをしらべよう	課 課	
	地域環境と人々の生活			
地方からの文化発信	人権の確立と民主政治			
	社会の発展と人間の歩み	Ⅲ香川の産業を支えている職人技を調べ、新聞にして情報発信しよう	課	

～社会科基底単元の構想（香川県版）より抜粋～

3 自己確立過程の評価と教材

(1) 具体的な子どもの表現物から

右は、5年単元「スーパーマーケットから農業生産のようすを調べよう」の学習で、ある子どもが書いたまとめの文章である。

下線部分は、「この子ども」や「クラスの子どもたち」が調べをして協定・共有化した情報・事実（基礎・基本の事項）である。この子どもは、「決まった市場にしか出荷していない」の事項を自分の文脈の中に入れて生産地との信頼関係という結論を導いていく。そのために、さらに市場と生産者の努力を関係づけてとらえ、信頼関係という考えの根拠として結びつけている。

こうして、自分や友達が調べた事項を「思考と表現」の場を通して吟味・解釈し、「自分なりに」関係・意味づけながら全体として「自分らしさ」を確認できる内容（基礎・基本の内容）に高めていっているのである。

「売れる野菜をつくるために」
きゅうりをきまった市場にしか出
荷していないのは、生産地と市場
が、おたがいに信らいしあて
ているからです。
市場では、高くても全部売れる
ようにしているし、生産者の方では、前日
と同じぐらい出荷できるようにしています。
こうしておく、生産者が安心して野
菜をつくります。そのために、消費者の
好みにあわせる工夫をしたり、市場に
行って宣伝をしているのです。

(2) 自己確立過程

どの子にも、前述の例のような「自分なりに創り上げた」「自分らしさを確認できる」内容を見いだすことのできる「学習過程」を構想できるようにする。その学習過程を自らあるいは友達や教師により「評価」する中で、自分を主体として学ぶことの楽しさや喜びを感じ得し、自己意識を高められるようにしたい。これを今後の社会科学学習で目指す授業像として設定する。そして、この一連を「自己確立過程」と呼びたい。

(3) 教材の見極め

前述のように具体をもってみてみると、「自分なりに」関係・意味づけた「自分らしさ」を確認できる基礎・基本の内容は、確かな基礎・基本の事項に支えられながら、子ども自らが作りあげていくものと理解できよう。貧弱な「事項」からは、豊かな「内容」が生まれてこようはずがない。画一的な事項からは自分らしい内容をつくることは難しい。また、その事項を取り入れて自分なりの論に高めていく学習方法にも多様性があることが、自己確立過程をより確かなものにしていく。

そういった自分らしい内容をつくる、多様な学習方法を生み出す「教材」とはいかなるものかを「見極めていく」。基礎・基本をどのように考えるかに立脚しつつ、こういった研究実践を本テーマは内包しているのである。

まとめてみると、

- ①自らの学びの道筋である「自己確立過程」を、自分らしさを認めながら「評価」できるためには、
 - ②どんな教材を選び（精選と多様化）、開発（メディアと加工）し、見極めればよいか。
- が、このテーマの示しているものなのである。

(4) 背景となる学習観の転換

以上のように研究テーマを設定し、その目指す授業像を描こうとする背景には、知識を授けようとしてきたことから、「生きる力」の育成を柱にすえた、学びの主体育成を目指す「学校知」へと変革していきたいという思いがある。

【学習主体としての子ども】

上から与えられた学習内容は、それがいかに整然と体系化されようとも、いやそうすればするほど学ぶことの意欲や手応え、あるいは学ぶことの意味を見いだすことの乖離を深めることになる。

本テーマに基づく授業像は、子ども一人一人が自分の世界を創造しようとする学習観を採っている。子ども一人一人が「外から得たものを、ちがった感覚として、ちがった仕方では何か一つのものとしてつかむ」（湯川秀樹「創造の世界」）過程としての学習観である。子どもたちが、自ら得た知識や概念を自分なりの考え方、感じ方で問い直し、知識と現実との関係を問い（意味理解）、自分自身のことも視野に入れながら考えを深めることによって、自分独自の個性やアイデンティティーを創造することに価値を置く。

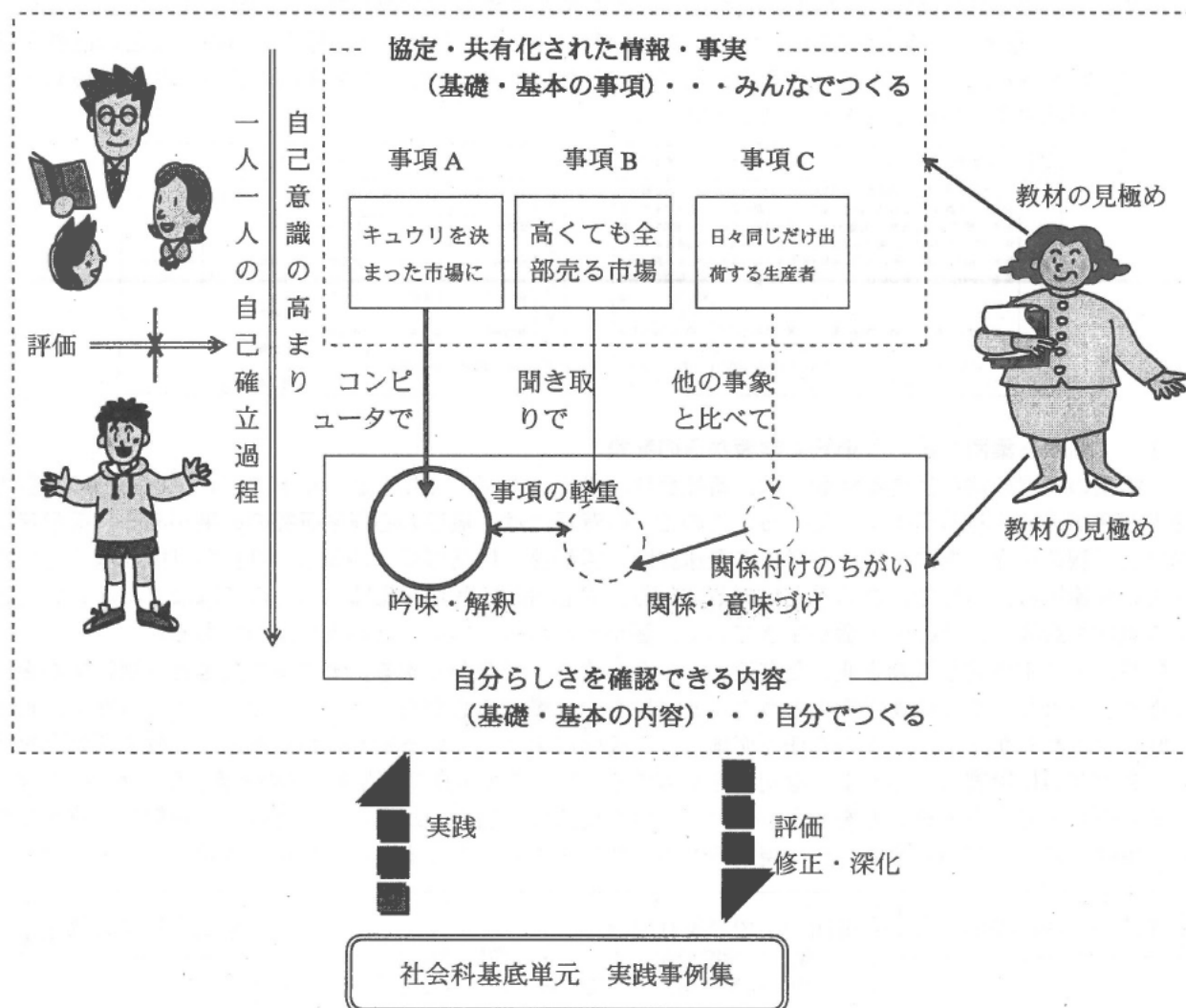
【共同と協同を通す】

最近の学習論では、認知活動は、学習者の置かれた状況に適応しながら進められると言われている。対人関係である社会や文化とのかかわりの中で学習が行われること、あるいは他者の知識と交渉し合う過程で「ワガモノ」としての知識構造をつくりあげられることが強調されている。文化遺産や知識の理解は、社会的交わりを媒介にして、また相互の働きかけによる「共同と協同」を通して深化されて社会的意味を発現させる。知識の習得も単なる私的所有としてではなく、他者と交換し合い、確かめ合い、共感し合うことによって、「ワガモノ」を形作り、生きる力として内在化する。

自己確立過程における他者とのかかわり、「協定・共有化」の大切さがここに表されている。

（５） 自己確立過程を軸とする学習の構想

以上述べてきた授業像を図化し、研究実践の一助となるよう提案しておくことにしたい。



4 学び方を学ぶ学習 ― 集団の中で個を育てる学習 ―

本研究会では、授業に「ゆとり」をもって問題解決的な学習を展開し、集団の中で個を育てるという立場から、いじめ対策などにも心した、個に応じた授業を試みてきた。その授業改造の視点は、

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・問いと論証の過程～認知過程～の探究 ・子どもの感性、感じ方を広げる支援・援助 ・よさを生かすことと、自己抑制の力を育てることの両立を図る、「自己意識・自己理解」の究明 ・「自己実現」を促す人間形成論に立つ学習過程の開発 | <ul style="list-style-type: none"> ・体験・表現重視による子ども理解 ・子ども理解に立つ指導案の工夫 |
|---|---|

である。

豊かでたくましく生きる人間づくりを求める上での、「真の学力の構造」を踏まえ、これからの社会科学学習では、学習論としてどのような理論と実践を展開し、「社会科の基礎・基本からカリキュラムを編成する」方策とするのか。これまでの研究の成果からその核となる部分について述べておきたい。

(1) 教材提示型学習からの脱却

新指導要領で示された、「観察や調査・見学、体験などの具体的な活動やそれに基づく表現活動をいっそう展開すること」を受け、社会科学学習の基軸をこうした活動におくとともに、そこから自ら見いだした課題をさらに深めるようにしたい。つまり、「子どもの表現物から課題を見つける」、言い換えると、「子どもの表現・反応を教材化」して学習を展開するのである。そのことで、教師が教材を提示する、言い換えると外発的な動機付けにより始まる学習から脱却したいのである。

本研究会では、下に掲げる「四つの調べ方法」と「多様な表現方法」を組み合わせる具体的な活動とそれに基づく表現活動を構想している。しかし、表現が単なる模倣や学習したことのまとめに終わってしまったのでは、「思考力」を育成することにはつながらない。表現したものの操作や再構成などの活動を学習過程に組み込んだり、学習内容やその単元で育成したい思考力に応じた効果的な表現方法を見極めたりして、学習計画を立てることを大切にしたい。

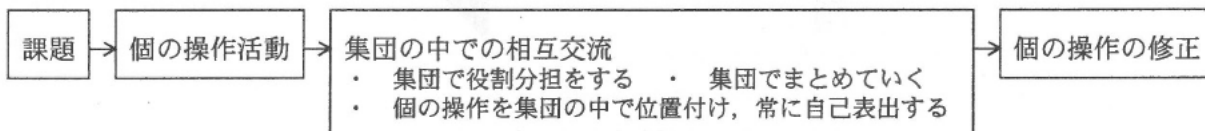
調べ方法	実物調べ	図表調べ	思い出し調べ	ひらめき調べ
主な特徴	生の現場で、実物にあたる調べであり、観察・見学・体験により感覚的・体感的に事実をつかむ。	意図的・目的的な調べであり、事実関係に留意がなく、調べる意図や目的にあった事実をつかむ。	「つまり」「つまり」と調べる側の論理に基づく調べであり、事実関係や背景とのつながりをつかむ。	意図的な調べで、新しい発想から、飛び込ませるものがないかの調べであり、事実と事実の調を埋めるものをつかむ。
特色	＜調べ問題の基本型＞ 「……実物にあたるう」	＜調べ問題の基本型＞ 「……をさがしてみよう」	＜調べ問題の基本型＞ 「つながりを調べよう」	＜調べ問題の基本型＞ 「別の点から探ろう」

	具 体 的 表 現 方 法				
類型	動 作	絵 画	図 表	音 声	記 号
主 な 活 動 内 容	動作化 人形劇づくり 劇づくり 役割演技 ごっこ活動等	絵画 立体模型 絵地図 紙芝居 かるた等	しくみ図 構想図 設計図 構成図等	絵と文 新聞 コンピュータ 制作 討論 文章表現等	色カード 印カード等

(2) 個から集団へという道筋の学習からの転換

「集団の中での個が生きる活動」は、新社会科が求める人間づくりを進める上で、ぜひともその学習方法の開発が求められるポイントである。このことの背景には、最近の心理学研究の成果がある。低学年における「個の確立」を踏まえ、中学年の発達課題「活動性」に基づく「仲間づくり」が可能となるという従来の発達観は、誤りではないかといわれている。同心円的に個から集団へいくのではなく、小さいときから集団を意識し、その中で個が生きていく、個がかかわっていくことが大切なのである。

授業の中で主体的な活動を通した友達との相互交流を一層豊かにする。その中で友達と一緒に何かをやり遂げようとし、そこに責任をもとうとする気持ちや我慢する心が育っていく。そういった意味で、集団と個のかかわりから一人一人の責任を明確にし、集団に果たしている役割の自覚をもち、個の活動と集団の活動が互いに影響を与えるような交流を組織する。このことが真の「個性重視の教育」だと考えている。「それぞれの考え方・感じ方を分かり合い支え合う交流」、「個と個が互いに支え合い、理解し、尊重し合い、集団に寄与していく交流」を実現するための要件を次のようにまとめ、授業の基軸としていきたい。



(3) 発問中心の授業の改善

新指導要領が示す「考える」の重視が、「教師の発問から」を中心とするのではなく、自分の表現物を操作しつつ思考を深めていくことで具現化されることが重要である。

そのために大切にしてきたことの一つ目は、操作しつつ思考を深めていくことのできる表現物を、一人一人がもっていることである。子どもが意欲をもち、個の能力に応じた取り組みができるより具象性のある教材としての「学習材」をもとに学習が進められるようにする。

二つ目は、「思考」が成立するための「操作」を表現とのかかわりの上で位置づけることである。思考とは、問題を解決していくための情報処理の働きである。多様な情報を操作していくことが、思考力を育てることにつながる。具体的には、三つの操作が絡み合って思考が成立すると考え実践していきたい。

類別思考 (くらべる)		関係思考 (つなぐ)			条件思考 (かえる)		
分 析	比 較	因 果	結 合	総 合	適 応	構 想	観点変更
事象を構成する因子を洗い出し、因子ごとに事象の特質を考える。	二つの事象を比較して、異同を考える。	事象間の原因—結果の関係を考える。	関係している事象間のつながりを考える。	分析した二つ以上の因子をつないで、新しい概念を考える。	事象に含まれている因子を他の事象にあてはめることにより、認識を深化し、拡充する思考である。	ひらめき思考、創造的な思考であり、事実を組み立てながら、見えないものを発見したり全体像を描いていく。	見方を変えることによって、因子の意味をとらえたり、二つの事象間の関係を発見する。

(4) 人間形成の学習論に立つ授業過程の開発 ～自己実現を求める自分を創る～

これまで、人間づくり・人格形成を本来的な目的として授業の実践がなされてきた。しかし、その授業過程を支える原則は、「学習内容をどう深め、広げるか」という内容論と「どのように分かり・できるか」という認識論であった。

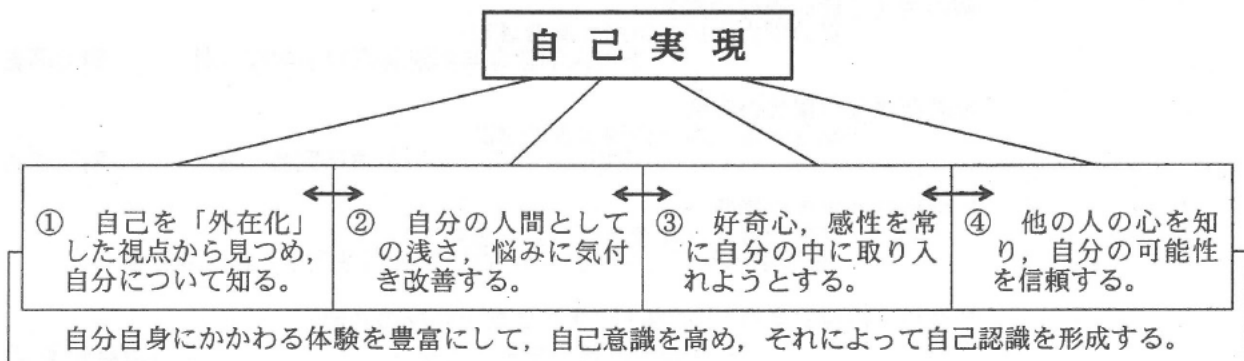
今の子どもたちを取り巻く諸問題を念頭に置いたとき、真の人間づくりをどう図るかという課題に「正面から取り組んだ学習論」と、そこに立つ授業過程の開発が急務である。こう考えたとき、従来の自己学習能力の育成を越えた要件を重視する必要がでてくる。

自分自身と対話しながら、自分の弱いところをカバーし、得意なところをみつけてよさを生かす。そんな自分を支え、一歩ずつ先に進んでいく。自分の可能性を長い見通しの中で開花実現するために、理想的自己のイメージをふくらませ、その方向に自分自身を少しずつ形成する努力を積み重ねて内面の中に生き方・在り方に関する一貫した原理・原則を作り上げる。言い換えると「自己実現を求める自分を創る」ということになる。単元展開の流れの中に、さらにそこで繰り広げられる1時間の授業過程の中に、個の自己形成、自己実現の力を高めるための学びの場を設定するのである。

今後、授業の中に組み入れていきたい「自己実現の過程」を以下に示しておく。

① 自己実現の要因

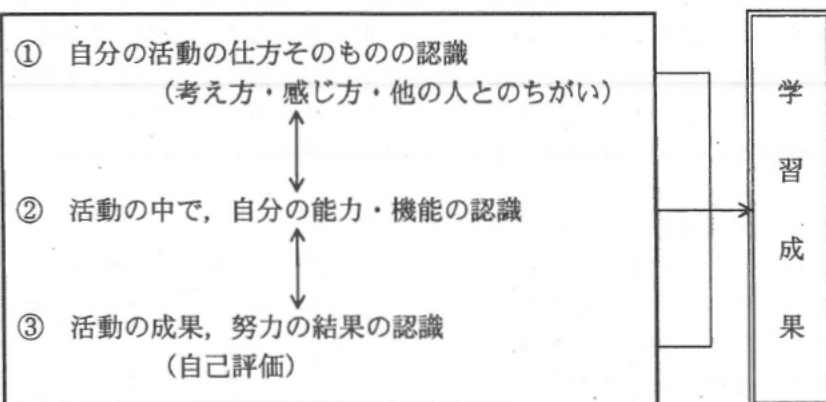
自己実現とは、自分自身に対して働きかけ、それまでになかった何かを、自分自身の上に実現していくことである。そして、そうした何かの実現は、価値的なものであり、人間としての成長・発達の達成として考えられるものでなくてはならない。具体的な授業の場面に置き換えると「どれだけ1時間の始めと終わり、人間的成長ができたのか」が評価される。何が分かったかとともに、どういう自分について、深く認識できるようになったかを見つめる。」ことである。そういった具体的な場面を念頭に置くと、自己実現の要因は、次の四つとなろう。



② 自己実現と授業過程

従来の過程では、授業の最後に学習の成果をにらんで、「自己評価」という形で自分への省察が位置付けてきた。これからは、授業過程の折にふれ、自分の「実感・納得・本音」に気付き、自分自身の見方・考え方を暗黙のうちに方向付けている内面の土台について理解できるようにしていきたい。

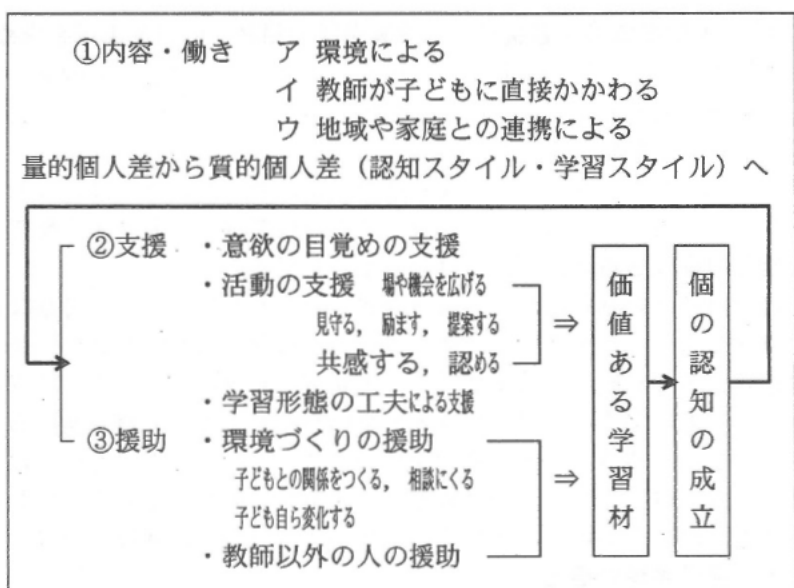
そのために、①～③を学年の発達に応じ、授業過程に組み入れる。



(5) 豊かにたくましく生きる人間づくりを求める教師の支援・援助活動

教師の支援・援助というと、すぐに児童に直接助言を与えることだと考えがちである。確かに教師の支援・援助は大きな役割を占めている。ただ、支援・援助活動は、他の児童の相互交流の場を設定したり、環境づくりを行ったりするような間接的なものも含めて幅広いものととらえ、授業で具現化を図ってきた。

このような支援・援助をもとにしつつ、価値ある学習材を媒介にして、自分のよさや不十分な点を友達の学びや、学習環境の中から見いだしていく。与えられるのを待つのではなく、自らが求めていく子どもの学びの姿を求めたい。



【本研究会の研究実践の歩みを示す図書】

新学力観に立つ社会科授業

—「問い」と「論証」の調べ学習—

香川県小学校社会科教育研究会 著

明治図書

個が生きる認知過程の探究

—真の学力形成を目指す教育課程—

香川大学教育学部附属高松小学校 著

明治図書

新教育課程の構想と実践

—総合学習・新社会科学習の展開—

香川県小学校社会科教育研究会 著

明治図書

社会科基底単元の構想

—内容の厳選と課題単位による展開—

香川県小学校社会科教育研究会 社会科基底単元作成委員会 著

社会科・総合的学習

基礎・基本の定着と発展の学習

—指導と評価の統一による—

香川県小学校社会科教育研究会 著

(7月頃発刊予定)

東洋館出版社

平成14年度 郡市社研役員名簿

【高松社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	関 根 建 一	校長	新塩屋町小	高・末広町 5	087-851-2011
副会長	亀 山 久 嘉	校長	木 太 南 小	高・木太町1530-1	087-866-7295
	植 松 勝	副校長	附属高松小	高・番町5-1-55	087-861-7108
	古 沢 博 美	校長	屋 島 東 小	高・屋島東町942-1	087-843-8402
庶 務	南 原 志 伸	教諭	屋 島 西 小	高・屋島西町2469	087-841-1063
	上 井 嘉	教諭	亀 阜 小	高・亀岡町10-1	087-861-2013
	大 嶋 和 彦	教諭	鶴 尾 小	高・松並町636-1	087-867-2564
会 計	高 橋 洋 子	教諭	花 園 小	高・花園町2-7-7	087-831-9129
研究部	市 原 茂 幹	教諭	亀 阜 小	高・亀岡町10-1	087-861-2013
	稲 田 耕 一	教諭	仏 生 山 小	高・仏生山町甲2461	087-889-0549
	葛 西 秀 樹	教諭	鶴 尾 小	高・松並町636-1	087-867-2564

【丸亀社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	金 山 達 夫	校長	郡 家 小	丸・郡家町790-1	0877-28-8401
副会長	香 川 佳 和	教頭	郡 家 小	丸・郡家町790-1	0877-28-8401
	田 井 敏 之	教頭	城 東 小	丸・土器町西五丁目113	0877-24-4703
庶 務	久保山 学	教諭	城 西 小	丸・六番丁12	0877-22-9267
会 計	北 分 英 樹	教諭	城 西 小	丸・六番丁12	0877-22-9267
研究部	川 田 英津子	教諭	垂 水 小	丸・垂水町1408	0877-28-7551
	中 山 誠	教諭	城 西 小	丸・六番丁12	0877-22-9267

【坂出社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	廣 田 秀 雄	校長	金 山 小	坂・谷町3-1-23	0877-46-2329
副会長	大 前 正 昭	校長	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
庶 務	吉 田 和 弘	教諭	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
会 計	野 村 亮 子	教諭	西 部 小	坂・白金町1-3-7	0877-46-2149
	高 尾 久美子	教諭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
研究部	大 西 浩 史	教諭	川 津 小	坂・川津町3093-1	0877-46-3884
	白 川 豊 浩	教諭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
	田 中 秀 年	教諭	西 庄 小	坂・西庄町524	0877-46-2662

【小豆社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	日 向 光 徳	校長	戸 形 小	小・土庄町甲3417	0879-62-0108
副会長	三 枝 慎 三	教頭	四 海 小	小・土庄町伊喜末381	0879-64-5051
	藤 本 修	教頭	北 浦 小	小・土庄町見目甲1587	0879-65-2021
庶 務	役 重 和 雅	教諭	安 田 小	小・内海町安田甲472-1	0879-82-2012
会 計					
研究部	林 宗 利	教諭	土 庄 小	小・土庄町甲657-7	0879-62-0068
	羽 座 則 史	教諭	星 城 小	小・内海町草壁本町632-1	0879-82-2011
	向 永 和 資	教諭	戸 形 小	小・土庄町甲3417	0879-62-0108

【大川社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	八 木 育 夫	校長	多 和 小	さぬき市多和字助光東30-1	0879-56-2002
副会長	古 市 聖 治	校長	長 尾 小	さぬき市長尾東901-1	0879-52-3181
	小 倉 健 治	校長	小 田 小	さぬき市小田1741	087-896-0066
	熊 田 正 美	校長	造 田 小	さぬき市造田是弘688-1	0879-52-2141
	徳 田 二三男	校長	石 田 小	さぬき市寒川町石田東甲425	0879-43-2006
	寺 田 文 久	校長	五 名 小	大・白鳥町五名1400	0879-29-2003
庶 務	三 井 重 彰	教頭	本 町 小	大・白鳥町松原167-1	0879-25-3064
	高 田 宏 隆	教諭	福 栄 小	大・白鳥町与田山351-1	0879-27-2323
	沖 肅 二	教諭	長 尾 小	さぬき市長尾東901-1	0879-52-3181
会 計	古 澤 哲 夫	教諭	松 尾 小	さぬき市大川町田面125	0879-43-3016
研究部	廣 瀬 強	教頭	富 田 小	さぬき市大川町富田西2595-2	0879-43-2016
	松 村 和 仁	教諭	津 田 小	さぬき市津田町津田144	0879-42-2047
	大 高 哲 也	教諭	長 尾 小	さぬき市長尾東901-1	0879-52-3181
	永 坂 邦 彦	教諭	長 尾 小	さぬき市長尾東901-1	0879-52-3181
	白 澤 一 修	教諭	小 田 小	さぬき市小田1741	087-896-0066

【木田社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	藤 原 政 志	校長	平 井 小	木・三木町平木710-1	087-898-0713
副会長	陶 山 真 司	教頭	小 養 小	木・三木町小養1351-1	087-899-1023
庶 務	泉 聡	教諭	牟 礼 北 小	木・牟礼町牟礼2900-1	087-845-5742
会 計	小笠原 学	教諭	白 山 小	木・三木町下高岡352-1	087-898-0257
研究部	前 田 宏 之	教諭	平 井 小	木・三木町平木710-1	087-898-0713
	花 田 奈緒子	教諭	氷 上 小	木・三木町氷上2845	087-898-0710
	小 山 順 子	教諭	庵 治 小	木・庵治町790-1	087-871-2581

【香川郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	鴨 井 俊 徳	校長	直 島 小	香・直島町1600	087-892-3007
副会長	野 崎 恭 一	教頭	香 南 小	香・香南町横井1008	087-879-2269
庶 務	田 岡 直 樹	教諭	川 東 小	香・香川町川東上1865-8	087-879-2012
会 計	喜 岡 永 光	教諭	川 東 小	香・香川町川東上1865-8	087-879-2012
研究部	田 岡 直 樹	教諭	川 東 小	香・香川町川東上1865-8	087-879-2012
	岡 佳 代	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野3088	087-889-0215

【綾歌郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	松 下 繁 美	校長	岡 田 小	綾・綾歌町岡田下217	0877-86-3004
副会長	上 原 公 子	教頭	西 分 小	綾・綾上町西分1208	087-878-2013
	田 中 直 樹	教頭	国分寺南部小	綾・国分寺町福家甲3005	087-874-1160
庶 務	花 房 長 広	教諭	陶 小	綾・綾南町陶5878	087-876-1182
会 計	馬 場 直 明	教諭	富 熊 小	綾・綾歌町富熊1227	0877-86-2010
研究部	宇 山 知 昌	教諭	西 分 南 小	綾・綾上町西分2213	087-878-2703
	真 井 孝 征	教諭	岡 田 小	綾・綾歌町岡田下217	0877-86-3004

【仲善社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	山 下 清 明	校長	満濃南小	仲・満濃町大字吉野74	0877-79-2110
副会長	水 卜 由 文	教頭	満濃南小	仲・満濃町大字吉野74	0877-79-2110
庶 務	森 井 信 一	教諭	四 箇 小	仲・多度津町三井433-1	0877-32-2517
	森 昭 二	教諭	善・東部小	善・稲木町450-1	0877-62-0703
会 計	谷 口 時 美	教諭	四 条 小	仲・満濃町四條732	0877-73-5514
研究部	坂 倉 徹	教諭	多 度 津 小	仲・多度津町栄町3-1-9	0877-33-1616
	横 川 正 信	教諭	豊 原 小	仲・多度津町南鴨704	0877-32-2050
	島 田 英 夫	教諭	南 部 小	善・生野町2990-1	0877-62-0702

【三豊社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 校	学 校 住 所	電 話
会 長	大 西 孝 典	校長	豊 浜 小	三・豊浜町和田浜1000	0875-52-2029
副会長	西 谷 則 一	校長	上 高 野 小	三・豊中町上高野2384	0875-62-2064
	各 務 清	校長	豊 田 小	観・新田町1413	0875-27-6303
庶 務	白 杵 優	教諭	柞 田 小	観・柞田町乙1000-1	0875-25-3621
	高 橋 克 佳	教諭	大 野 原 小	三・大野原町大野原1905	0875-54-2029
会 計	白 杵 優	教諭	柞 田 小	観・柞田町乙1000-1	0875-25-3621
研究部	安 藤 通	教諭	観音寺東小	観・観音寺町甲670-2	0875-25-2219
	高 橋 克 佳	教諭	大 野 原 小	三・大野原町大野原1905	0875-54-2029
	岩 倉 隆 視	教諭	二ノ宮小	三・高瀬町佐股甲1497-1	0875-74-6302
	岸 上 也 寸志	教諭	観音寺南小	観・観音寺町甲1186-2	0875-25-4675

平成14年度 各部代表者名簿

【高松社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 屋 島 西 小	南 原 志 伸	6 年
	② 築 地 小	福 家 親 夫	6 年
	③ 亀 阜 小	上 井 嘉	6 年
研究会	① 亀 阜 小	市 原 茂 幹	4 年
	② 花 園 小	高 橋 洋 子	5 年
	③ 鶴 尾 小	大 嶋 和 彦	6 年
基礎・テスト部	① 仏 生 山 小	稲 田 耕 一	5 年
	② 屋 島 西 小	黒 川 浩 一	4 年
	③ 鶴 尾 小	葛 西 秀 樹	4 年

【丸亀社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定例会	① 飯 野 小	山 地 正 記	5 年
	② 広 島 小	宮 本 正 輝	6 年
研究部	① 垂 水 小	川 田 英 津 子	2 年
	② 城 西 小	中 山 誠	3 年
基礎・テスト部	① 城 辰 小	増 井 泰 弘	4 年
	② 城 坤 小	平 澤 昌 司	6 年
	③ 郡 家 小	守 家 恵 子	5 年
香社研勉強会	① 城 南 小	多 田 明 広	6 年
	② 城 北 小	石 川 裕 之	教 務
	③ 小 手 島 小	合 田 吉 宏	5・6 年
	③ 城 坤 小	寒 川 英 樹	教 務

【坂出社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 東 部 小	吉 田 和 弘	6 年
	② 西 部 小	野 村 亮 子	障 害 児
	③ 中 央 小	高 尾 久 美 子	障 害 児
研 究 部	① 川 津 小	大 西 浩 史	6 年
	② 中 央 小	白 川 豊 浩	6 年
	③		
基 礎・テ スト部	① 西 部 小	岡 本 敏 英	2 年
	② 府 中 小	福 家 寿 夫	6 年
	③		

【小豆社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 星 城 小	羽 座 則 史	
	② 大 鐸 小	樋 本 清 和	3 年
	③		
研 究 部	① 土 庄 小	林 宗 利	1 年
	② 安 田 小	役 重 和 雅	
	③		
基 礎・テ スト部	① 戸 形 小	向 永 和 資	4 年
	②		
	③		

【大川社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 長 尾 小	沖 肅 二	4 年
	② 福 栄 小	高 田 宏 隆	3 年
	③ 長 尾 小	永 坂 邦 彦	6 年
研 究 部	① 津 田 小	松 村 和 仁	少 人 数
	② 長 尾 小	大 高 哲 也	生 活 支 援
	③ 小 田 小	白 澤 一 修	4 年
基 礎 ・ テ ス ト 部	① 福 栄 小	高 田 宏 隆	3 年
	② 富 田 小	橋 本 義 人	6 年
	③ 小 田 小	梅 本 明 宏	2 年

【木田社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 牟 礼 北 小	伏 見 千 珠	3 年
	② 庵 治 小	佐 々 和 美	5 年
	③ 平 井 小	武 田 玲 子	3 年
研 究 部	① 平 井 小	前 田 宏 之	4 年
	② 氷 上 小	花 田 奈 緒 子	4 年
	③ 庵 治 小	小 山 順 子	4 年
基 礎 ・ テ ス ト 部	① 白 山 小	土 井 京 子	3 年
	② 氷 上 小	柴 原 照 子	少 人 数
	③		

【香川社研】

		学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	代 表 者	① 浅 野 小	小 原 敏 昭	5 年
		② 浅 野 小	川 村 千 寿	6 年
		③ 香 南 小	上 田 美 恵	6 年
研 究 部	代 表 者	① 川 東 小	田 岡 直 樹	5 年
		② 川 東 小	喜 岡 永 光	4 年
		③ 浅 野 小	岡 佳 代	3 年
基 礎・ テ ス ト 部	代 表 者	① 大 野 小	野 土 裕 彦	少 人 数
		② 大 野 小	長 岡 伸 幸	障 害 児
		③ 塩 江 小	萬 谷 紀 子	5 年

【綾歌社研】

		学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会		① 西 分 南 小	宇 山 知 昌	5・6 年
		② 陶 小	花 房 長 広	3 年
		③ 国 分 寺 南 部 小	平 野 希 代 子	3 年
研 究 部		① 岡 田 小	真 井 孝 征	6 年
		② 国 分 寺 南 部 小	大 高 浩 一	5 年
		③ 粉 所 小	高 吉 直 之	2 年
基 礎・ テ ス ト 部		① 富 熊 小	馬 場 直 明	6 年
		② 岡 田 小	林 聖 士	6 年
		③ 山 田 小	青 木 弥 生	6 年

【仲善社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 吉 原 小	亀 山 典 良	少 人 数
	② 満 濃 南 小	高 橋 義 徳	5 年
	③		
研 究 部	① 多 度 津 小	坂 倉 徹	6 年
	② 南 部 小	島 田 英 夫	3 年
	③ 豊 原 小	横 川 正 信	5 年
基 礎・ テ ス ト 部	① 仲 南 北 小	高 家 和 彦	5 年
	② 豊 原 小	横 川 正 信	5 年
	③ 高 篠 小	吉 村 富 士 代	6 年

【三豊社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年
定 例 会	① 二 ノ 宮 小	岩 倉 隆 視	6 年
	② 観 音 寺 南 小	岸 上 也 寸 志	少 人 数
	③ 柞 田 小	白 杵 優	6 年
研 究 部	① 観 音 寺 東 小	安 藤 通	6 年
	② 大 野 原 小	高 橋 克 佳	4 年
	③ 詫 間 小	赤 坂 光 敏	6 年
基 礎・ テ ス ト 部	① 勝 間 小	三 崎 彰 夫	5 年
	② 観 音 寺 東 小	萬 亀 弘 吉	6 年
	③ 仁 尾 小	小 西 寛	6 年

平成14年度 郡市会員名簿

高松市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	760-0020	錦町2-14-1	二 番 丁 小	6	檜 原 一 宏	087 851-3741	
2	760-0006	亀岡町10-1	亀 阜 小	教頭	徳 田 仁 司	861-2013	
3	"	"	"	6	上 井 嘉	"	
4	"	"	"	4	市 原 茂 幹	"	
5	760-0073	栗林町2-10-7	栗 林 小	5	橋 本 康 裕	861-3438	
6	"	"	"	1	小 西 宏 幸	"	
7	"	"	"	4	高 木 恭 子	"	
8	760-0072	花園町2-7-7	花 園 小	5	高 橋 洋 子	831-9129	
9	760-0068	松島町2-14-5	松 島 小	5	安 倍 幸 則	861-4503	
10	760-0061	築地町14-1	築 地 小	校長	高 橋 英 武	831-7188	
11	"	"	"	教頭	藤 本 一 郎	"	
12	"	"	"	6	福 家 親 夫	"	
13	760-0060	末広町5	新 塩 屋 町 小	校長	関 根 建 一	851-2011	
14	"	"	"	内留	岡 本 英 孝	"	
15	"	"	"	3	佐 立 茂 樹	"	
16	761-8052	松並町636-1	鶴 尾 小	5	田 邊 裕一朗	867-2564	
17	"	"	"	少人数	大 嶋 和 彦	"	
18	"	"	"	4	葛 西 秀 樹	"	
19	760-0080	木太町3480-1	木 太 小	教頭	野 島 悟	861-6337	
20	"	"	"	3	佐々木 誠	"	
21	"	"	"	6	木 村 ますみ	"	
22	761-0322	前田東町819-3	前 田 小	教頭	池 田 孝 徳	847-6562	
23	"	"	"	進路	香 西 謙 二	"	
24	761-0301	林町1108-1	林 小	4	井 上 泉	865-6250	
25	761-8078	仏生山町甲2461	仏 生 山 小	教頭	山 下 晃	889-0549	
26	"	"	"	5	稲 田 耕 一	"	
27	761-8044	円座町1630-2	円 座 小	6	福 家 正 人	885-2542	
28	761-8042	御厩町816	檀 紙 小	T・T	蓮 本 和 博	885-1715	
29	761-8032	鶴市町374-1	弦 打 小	専	池 田 茂 樹	881-3523	
30	761-8023	鬼無町佐藤607-1	鬼 無 小	障害児	岡 野 武 史	881-2413	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
31	761-0443	川島東町864-1	川 島 小	3	宇喜多 孝 明	087 848-0050	
32	"	"	"	5	寺 島 幹 人	"	
33	761-0445	西植田町2337	植 田 小	障害児	横 井 裕 子	849-0103	
34	760-0079	松縄町807-1	中 央 小	教頭	藤 田 和 代	866-2938	
35	760-0080	木太町1530-1	木 太 南 小	校長	亀 山 久 嘉	866-7295	
36	761-0111	屋島東町942-1	屋 島 東 小	校長	古 沢 博 美	843-8402	
37	"	"	"	6	蘆 原 秀 稔	"	
38	761-0113	屋島西町2469	屋 島 西 小	教頭	田 村 秀 忠	841-1063	
39	"	"	"	6	南 原 志 伸	"	
40	"	"	"	4	黒 川 浩 一	"	
41	"	"	"	3	青 木 隆 明	"	
42	760-0017	番町5-1-55	附 属 高 松 小	副校長	植 松 勝	861-7108	
43	"	"	"	6	喜 多 文 彦	"	
44	"	"	"	4	日 下 哲 也	"	
45	"	"	"	2	寺 嶋 俊 秀	"	
46	"	"	"	6	榎 貴 志	"	
47	"	"	"	4	亀 井 健 男	"	
48	"	"	"	6	三 木 省 二	"	

丸亀市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	763-0033	中府町五丁目15-1	城 乾 小	4	荻 田 敬 子	0877 22-8158	
2	763-0051	今津町348	城 坤 小	3	佐々木 美 華	24-4705	
3	"	"	"	5	吉 田 良 三	"	
4	"	"	"	少人数	平 澤 昌 司	"	
5	"	"	"	少人数	寒 川 英 樹	"	
6	763-0002	瓦町95	城 北 小	教務	石 川 裕 之	24-4700	
7	"	"	"	3	高 木 弘 信	"	
8	763-0026	六番丁12	城 西 小	4	久保山 学	22-9267	
9	"	"	"	6	北 分 英 樹	"	
10	"	"	"	3	中 山 誠	"	
11	763-0071	田村町973	城 南 小	6	香 川 浩 子	24-6177	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
12	763-0071	田村町973	城 南 小	6	多 田 明 広	0877 24-6177	
13	"	"	"	少人数	山 野 正 登	"	
14	763-0091	川西町北151	城 辰 小	4	増 井 泰 弘	28-7401	
15	763-0093	郡家町790-1	郡 家 小	校長	金 山 達 夫	28-8401	
16	"	"	"	教頭	香 川 佳 和	"	
17	"	"	"	5	守 家 恵 子	"	
18	"	"	"	5	樋 口 昌 樹	"	
19	763-0086	飯野町西分113	飯 野 小	5	山 地 正 記	22-6019	
20	763-0095	垂水町1408	垂 水 小	2	川 田 英津子	28-7551	
21	763-0102	広島町江の浦439	広 島 小	6	宮 本 正 輝	29-2031	
22	763-0108	広島町小手島2782	小 手 島 小	5・6	合 田 吉 宏	29-2751	

坂出市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	762-0042	白金町1-3-7	西 部 小	障害児	野 村 亮 子	0877 46-2149	
2	"	"	"	2	岡 本 敏 英	"	
3	762-0043	寿町3-1-2	中 央 小	2	旅 田 敏 弘	46-2124	
4	"	"	"	障害児	高 尾 久美子	"	
5	"	"	"	6	白 川 豊 浩	"	
6	762-0007	室町1-1-21	東 部 小	校長	大 前 正 昭	46-0234	
7	"	"	"	教頭	金 井 宏 諾	"	
8	"	"	"	6	東 原 淳 子	"	
9	"	"	"	障害児	多田羅 洋 子	"	
10	"	"	"	6	吉 田 和 弘	"	
11	"	"	"	6	真 鍋 長 嗣	"	
12	762-0033	谷町3-1-23	金 山 小	校長	廣 田 秀 雄	46-2329	
13	"	"	"	6	丸 尾 ルミ子	"	
14	"	"	"	2	岡 野 栄 子	"	
15	762-0021	西庄町524-2	西 庄 小	4	田 中 秀 年	46-2662	
16	762-0012	林田町2191	林 田 小	4	池 内 智 哉	47-0270	
17	762-0023	加茂町1099	加 茂 小	5	佐 藤 和 代	48-0601	
18	762-0024	府中町1193-3	府 中 小	6	福 家 寿 夫	48-0610	
19	762-0025	川津町3093-1	川 津 小	4	丸 岡 小百合	46-3884	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
20	762-0025	川津町3093-1	川 津 小	6	大 西 浩 史	0877 46-3884	
21	762-0067	瀬居町1490	瀬 居 小	教頭	亀 井 彰	46-9194	
22	762-0072	岩黒240	岩 黒 小	5	岡 野 雄太郎	43-0104	
23	762-0031	文京町2-4-2	附 坂 小	3	合 田 雅 気	46-2692	
24	"	"	"	6	佐 柳 仁	"	
25	762-0043	寿町3-1-2	中 央 小	内留	河 野 富 男	45-2124	

小豆郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-4106	土庄町甲657-7	土 庄 小	1	林 宗 利	0879 62-0068	
2	"	"	"	少人	後 藤 正 幸	"	
3	761-4115	土庄町甲3417	戸 形 小	校長	日 向 光 徳	62-0108	
4	"	"	"	4	向 永 和 資	"	
5	761-4121	土庄町湊崎甲1256	湊 崎 小	5	上 嶋 光 晴	62-0072	
6	"	"	"	少人	岡 左也佳	"	
7	761-4151	土庄町肥土山甲1735	大 鐸 小	3	樋 本 清 和	62-0712	
8	761-4143	土庄町見目甲1587	北 浦 小	教頭	藤 本 修	65-2021	
9	"	"	"	3	江 口 善 喬	"	
10	761-4131	土庄町伊喜末381	四 海 小	教頭	三 枝 慎 三	64-5051	
11	"	"	"	障児	脇 坂 敦	"	
12	761-4301	池田町池田1760	池 田 小	4	巾 野 美砂子	75-2222	
13	"	"	"	3	十 鳥 憲 治	"	
14	761-4432	内海町草壁本町632-1	星 城 小	少人	羽 座 則 史	82-2011	
15	"	"	"	6	河 田 祥 司	"	
16	761-4411	内海町安田甲472-1	安 田 小	支援	役 重 和 雅	82-2012	
17	761-4421	内海町苗羽甲1371-1	苗 羽 小		日 下 ゆかり	82-2013	
18	761-4402	内海町福田甲718-1	福 田 小	3	植 田 貴 弘	84-2023	

大川郡・さぬき市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	769-2713	白鳥町与田山351-1	福 栄 小	3	高 田 宏 隆	0879 27-2323	
2	769-2715	白鳥町五名1400	五 名 小	校長	寺 田 文 久	29-2003	
3	769-2702	白鳥町松原167-1	本 町 小	教頭	三 井 重 彰	25-3064	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
4	769-2702	白鳥町松原167-1	本 町 小	5	窪 田 史 子	0879 25-3064	
5	"	"	"	5	西 山 雅 道	"	
6	769-2601	大内町三本松862-1	三 本 松 小	5	六 車 浩	25-2664	
7	769-2605	大内町中筋425	誉 水 小	少担	村 上 勝	25-2044	
8	769-2515	大内町町田126-1	丹 生 小	4	氏 原 美架子	25-3504	
9	761-0904	大川町田面125	松 尾 小	4	古 澤 哲 夫	43-3016	
10	761-0901	大川町富田西2595-2	富 田 小	教頭	廣 瀬 強	43-2016	
11	"	"	"	5	山 下 勝 正	"	
12	"	"	"	6	橋 本 義 人	"	
13	769-2321	寒川町石田東甲425	石 田 小	校長	徳 田 二三男	43-2006	
14	"	"	"	教頭	穴 吹 眞 二	"	
15	"	"	"	2	杉 本 佳 子	"	
16	"	"	"	3	村 川 智 美	"	
17	769-2323	寒川町神前1615	神 前 小	教頭	大 岡 眞 海	43-2124	
18	"	"	"	3	濱 口 ひろ子	"	
19	769-2312	造田是弘688-1	造 田 小	校長	熊 田 正 美	52-2141	
20	769-2301	長尾東901-1	長 尾 小	校長	古 市 聖 治	52-3181	
21	"	"	"	4	沖 肅 二	"	
22	"	"	"	生支援	大 高 哲 也	"	
23	"	"	"	6	永 坂 邦 彦	"	
24	769-2306	多和助光東30-1	多 和 小	校長	八 木 育 夫	56-2002	
25	769-2101	志度727	志 度 小	5	野 口 幸 嗣	087 894-0041	
26	"	"	"	6	松 田 章 子	"	
27	769-2103	小田1741	小 田 小	校長	小 倉 健 治	087 896-0066	
28	"	"	"	4	白 澤 一 修	"	
29	"	"	"	2	梅 本 明 宏	"	
30	769-2401	津田町津田144	津 田 小	少担	松 村 和 仁	0879 42-2047	

木田郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-0704	三木町下高岡352-1	白 山 小	専科	小笠原 学	087 898-0257	
2	761-0702	三木町平木710-1	平 井 小	4	前 田 宏 之	" 898-0713	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
3	761-0702	三木町平木710-1	平 井 小	3	武 田 玲 子	087 898-0713	
4	761-0615	三木町大字小蓑1351-1	小 蓑 小	教頭	陶 山 真 司	" 899-1023	
5	761-0130	庵治町6034-1	庵 治 第 二 小	1・2	筒 井 みゆき	" 871-5110	
6	761-0122	牟礼町大町1560	牟 礼 小	障害児	磯 部 康 子	" 845-9239	
7	"	"	"	4	村 松 眞 弓	"	
8	761-0121	牟礼町牟礼2900-1	牟 礼 北 小	専科	泉 聡	" 845-5742	
9	"	"	"	3	伏 見 千 珠	"	
10	761-0704	三木町下高岡352-1	白 山 小	3	土 井 京 子	087 898-0257	
11	761-0612	三木町永上2845	永 上 小	少人数	柴 原 照 子	" 898-0710	
12	"	"	永 上 小	4	花 田 奈緒子	"	
13	761-0130	庵治町790-1	庵 治 小	5	佐 々 和 美	087 871-2581	
14	"	"	"	4	小 山 順 子	"	
15	761-0702	三木町平水710-1	平 井 小	校長	藤 原 政 志	087 898-0713	

香川郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-3110	直島町1600	直 島 小	校長	鴨 井 俊 徳	087 892-3007	
2	761-1404	香南町横井1008	香 南 小	教頭	野 崎 恭 一	879-2269	
3	761-1612	塩江町安原上東365	塩 江 小	5	萬 谷 紀 子	893-0027	
4	761-1701	香川町大野1045-1	大 野 小	少人数	野 土 裕 彦	885-2165	
5	"	"	"	障害児	長 岡 伸 幸	"	
6	761-1703	香川町浅野3088	浅 野 小	5	小 原 敏 昭	889-0215	
7	"	"	"	3	岡 佳 代	"	
8	"	"	"	6	川 村 千 寿	"	
9	761-1706	香川町川東上1865-8	川 東 小	4	喜 岡 永 光	879-2012	
10	"	"	"	5	田 岡 直 樹	"	
11	761-1404	香南町横井1008	香 南 小	4	湯 浅 良 子	879-2269	
12	"	"	"	6	上 田 美 恵	"	
13	761-3110	直島町1600	直 島 小	4	大 奥 洋 介	892-3007	

綾歌郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	761-2101	綾南町畑田2381	昭 和 小	6	岡 内 智 子	087 877-0519	
2	761-2103	綾南町陶5878	陶 小	3	花 房 長 広	876-1182	
3	761-2202	綾上町粉所西甲2060	粉 所 小	3	岡 朝 子	878-2312	
4	761-2203	綾上町山田上甲1494-1	山 田 小	6	青 木 弥 生	878-2004	
5	761-2206	綾上町西分1208	西 分 小	教頭	上 原 公 子	878-2013	
6	"	"	"	6	川 井 國 博	"	
7	"	綾上町西分2213	西 分 南 小	5・6	宇 山 知 昌	878-2703	
8	761-2207	綾上町羽床上788-1	羽 床 上 小	3	宮 武 克 明	878-0820	
9	761-2305	綾南町滝宮1100	滝 宮 小	6	小 谷 修	876-1183	
10	761-2402	綾歌町岡田下217	岡 田 小	校長	松 下 繁 美	0877 86-3004	
11	"	"	"	6	林 聖 士	"	
12	"	"	"	6	真 井 孝 征	"	
13	"	"	"	4	西 村 道 代	"	
14	"	"	"	5	徳 永 桂 子	"	
15	761-2406	綾歌町栗熊東323	栗 熊 小	6	合 田 徹 子	86-2002	
16	761-2407	綾歌町富熊1227	富 熊 小	6	馬 場 直 明	86-2010	
17	762-0084	飯山町上法軍寺1206	飯 山 南 小	6	米 澤 亜矢子	98-2024	
18	769-0101	国分寺町新居1880	国分寺北部小	3	竹 下 紀 子	087 874-1154	
19	"	"	"	6	西 尾 由 加	"	
20	"	"	"	4	甲 斐 由紀恵	"	
21	769-0103	国分寺町福家甲3005	国分寺南部小	校長	山 崎 敏 和	874-1160	
22	"	"	"	教頭	田 中 直 樹	"	
23	"	"	"	4	早 瀬 良 子	"	
24	"	"	"	3	蓮 本 悟 美	"	
25	"	"	"	3	平 野 希代子	"	
26	"	"	"	5	大 高 浩 一	"	
27	"	"	"	4	須 田 美佐子	"	
28	769-0208	宇多津町浜八番丁115	宇多津北小	4	水 本 功	0877 49-2000	
29	769-0210	宇多津町815	宇 多 津 小	6	森 昭	49-1820	

仲多度郡・善通寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	766-0013	満濃町東高篠139	高 篠 小	6	吉 村 富士代	0877 73-3842	
2	766-0021	満濃町四條732	四 条 小	6	谷 口 時 美	73-5514	
3	766-0023	満濃町吉野74	満 濃 南 小	校長	山 下 清 明	79-2110	
4	〃	〃	〃	教頭	水 卜 由 文	〃	
5	〃	〃	〃	5	高 橋 義 徳	〃	
6	766-0017	満濃町炭所西1431-2	長 炭 小	3	中 西 昇	79-2006	
7	〃	〃	〃	教頭	森 本 義 臣	〃	
8	769-0303	仲南町七箇2529	仲 南 東 小	6	澤 田 恵 子	77-2140	
9	769-0312	仲南町十郷750-4	仲 南 北 小	校長	三 井 尚	75-4032	
10	〃	〃	〃	6	高 家 和 彦	〃	
11	766-0002	琴平町145-1	琴 平 小	教頭	片 井 功	73-2831	
12	766-0006	琴平町上櫛梨26	象 郷 小	6	亀 井 雅 子	73-2830	
13	764-0032	多度津町三井433-1	四 箇 小	5	森 井 信 一	32-2517	
14	764-0026	多度津町南鴨704	豊 原 小	5	横 川 正 信	32-2050	
15	764-0011	多度津町栄町3丁目1-9	多 度 津 小	6	坂 倉 徹	33-1616	
16	765-0013	善・文京町四丁目5-1	中 央 小	6	近 藤 めぐみ	62-1616	
17	765-0053	善・生野町2990-1	南 部 小	校長	岡 根 淳 二	62-0702	
18	〃	〃	〃	3	島 田 英 夫	〃	
19	765-0022	善・稲木町450-1	東 部 小	6	森 昭 二	62-0703	
20	765-0040	善・与北町1238	与 北 小	6	大久保 敬 現	62-0704	
21	765-0032	善・原田町306-1	竜 川 小	4	西 宇 宏 美	62-0705	
22	765-0073	善・中村町1575-2	筆 岡 小	4	大 西 祐 子	62-0706	
23	765-0061	善・吉原町2811	吉 原 小	少人数	亀 山 典 良	62-0707	

三豊郡・観音寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
1	769-1602	豊浜町大字和田浜1000	豊 浜 小	校長	大 西 孝 典	0875 52-2029	
2	〃	〃	〃	教頭	平 川 博	〃	
3	〃	〃	〃	4	近 藤 あけみ	〃	
4	〃	〃	〃	3	清 水 裕 子	〃	
5	〃	〃	〃	2	渡 部 岳 史	〃	
6	769-1621	大野原町大字 五郷井関311	五 郷 小	教頭	安 藤 清 和	54-2803	

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学校電話	自宅電話
7	769-1614	大野原町大字萩原2354	萩 原 小	校長	渡 邊 重 忠	0875 54-2079	
8	769-1611	大野原町大字 大野原1905	大 野 原 小	4	高 橋 克 佳	54-2029	
9	768-0040	観・杵田町乙1000-1	杵 田 小	6	臼 杵 優	25-3621	
10	"	"	"	4	轟 秀 明	"	
11	768-0033	観・新田町1413	豊 田 小	校長	各 務 清	27-6303	
12	768-0060	観・観音寺町甲1186-2	観 音 寺 南 小	少人数	岸 上 也 寸 志	25-4675	
13	"	"	"	専科	深 川 隆	"	
14	768-0060	観・観音寺町甲670-2	観 音 寺 東 小	6	安 藤 通	25-2219	
15	"	"	"	6	萬 亀 弘 吉	"	
16	"	"	"	3	片 岡 由 起 子	"	
17	768-0104	山本町大字神田1259	神 田 小	障害児	宮 武 一 美	63-2193	
18	"	"	"	5	安 藤 雅 慶	"	
19	769-1504	豊中町上高野2384	上 高 野 小	校長	西 谷 則 一	62-2064	
20	769-1502	豊中町大字笠田笠岡 2191	笠 田 小	校長	田 井 秀 典	62-2004	
21	767-0011	高瀬町大字下勝間803	勝 間 小	5	三 崎 彰 夫	72-5329	
22	767-0021	高瀬町大字佐股甲 1497-1	二 ノ 宮 小	6	岩 倉 隆 視	74-6302	
23	"	"	"	4	國 土 英 二	"	
24	767-0013	高瀬町大字下麻1209	麻 小	6	篠 原 正 議	74-6237	
25	"	"	"	少人数	野 田 明 子	"	
26	767-0001	高瀬町大字上高瀬783	上 高 瀬 小	教頭	香 川 文 男	72-5309	
27	767-0031	三野町大字大見甲 3034-4	大 見 小	校長	前 田 高 次	72-5402	
28	769-1403	仁尾町大字仁尾丙1736	仁 尾 小	6	小 西 寛	82-2049	
29	"	"	"	4	岡 田 明 子	"	
30	769-1101	詫間町大字詫間2158	詫 間 小	5	赤 坂 光 敏	83-2858	
31	769-1104	詫間町大字大浜甲1633	大 浜 小	4	秋 元 一 秀	84-7359	

